

畠ヶ田遺跡

—（仮称）新みどり保育園の建設に伴う発掘調査（HD2011-1）—

2012. 1

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は、市域の中心を石川が流れ、緑豊かな丘陵と美しい田園風景が調和した自然環境に恵まれたまちです。そのなかでも、中央部の石川とその支流によって形成された平野部は、遺跡が多く存在することから、古くより人びとの営みが行われていたことがわかっています。

このような事実の蓄積は、市独自の発掘調査のほか、新たな土地開発の際に実施した発掘調査からもなされてきました。

本書は、2011（平成23）年に（仮称）新みどり保育園の建設に先立ち、発掘調査を行った畠ヶ田遺跡の成果をまとめたものです。奈良時代の銭貨を入れた土師器は、府内でも数少ない事例であり、本市のみならず我が国の歴史を知るうえでも貴重な発見となりました。これらの成果を次の世代に引き継ぐために、今回の調査で得られた見地が有効に活用されることを、望んでやみません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたって、多大なご協力をいただきました社会福祉法人光久福祉会をはじめ、関係各位に深く感謝の意を申し上げます。

2012（平成24）年1月

富田林市教育委員会

例 言

1. 本書は、(仮称)新みどり保育園の建設に先立ち実施した畠ヶ田遺跡の発掘調査報告書である。
調査地は大阪府富田林市若松町一丁目に所在し、調査番号はHD2011-1である。
2. 調査は、社会福祉法人光久福祉会の依頼を受けて、富田林市教育委員会が行った。調査にご理解、ご協力をいただいた社会福祉法人光久福祉会に感謝の意を表します。
3. 現地調査は、富田林市教育委員会文化財課職員 角南辰馬を担当として、2011(平成23)年7月11日には着手し、同年8月31日に終了した。調査面積は約758m²である。現地調査における掘削作業は安西工業株式会社、空中写真測量は株式会社アコードに委託して行った。
4. 整理作業は、角南および同課非常勤職員 栗田 薫を担当とし、現地調査と並行して開始した。
5. 現地調査には、磯田有紀、土井春奈、豊島享志、的場尚代、南 貴明の諸氏が参加した。
6. 遺構および遺物(原色図版1・4、図版15を除く)の写真撮影は、角南が行った。
7. 本書における遺物の項の執筆は栗田と角南が、それ以外の執筆と編集は角南が担当した。
8. 土坑出土の土師器(遺物番号69・70)については、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 高妻洋成氏のご協力により、X線撮影およびX線CT撮影を実施するとともに、クリーニングおよび保存処理作業のほか、多大なご教示を賜った。記して感謝の意を表します。
9. 土坑出土の土師器(遺物番号69・70)内の種子等については、奈良教育大学 金原正明氏に分析を依頼し、多大なご教示とともに玉稿を賜った。記して感謝の意を表します。
10. 原色図版1に使用した土坑出土の土師器の写真撮影は、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 中村一郎氏に依頼した。記して感謝の意を表します。
11. 下記の諸機関、諸氏から有益なご教示、ご助力を賜った。ご芳名を記して、感謝の意を表します。(敬称略・順不同)
大阪府教育委員会、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所、奈良教育大学、和泉市教育委員会、堺市教育委員会、出土銭貨研究会
青木 歆、家原圭太、乾 哲也、尾上 実、岸本直文、小浜 成、小林義孝、近藤康司、榮原永遠男、白石耕治、辻井なつみ、中村 浩、永井久美男、西口陽一、松村恵司、渡辺 昇
12. 現地調査での実測図および写真、出土遺物については、富田林市教育委員会で保管している。広く活用されることを望むものである。

凡 例

1. 本書に掲載した標高は、東京湾標準潮位(T.P.)で表示している。
2. 本書に掲載した座標は、世界測地系に基づくものである。また、方位は注記のあるものを除いて座標北を示している。
3. 土色の色調は、小山正忠・竹原秀雄1986『新版標準土色帖』による表記である。
4. 遺構番号については、現地調査中は地区や遺構の種類に関係なく、通し番号(F番号)を付与した。現地調査終了後、下記の略記号を用いて遺構の種類ごとに付け替えた。本書での表記は後者である。
S P : ピット(紙面の都合上、番号のみの場合もS Pを指す) S K : 土坑 S D : 溝
S X : 性格不明遺構
5. 遺物実測図の断面は、例外を除いて種類により下記のように表現した。
須恵器: 黒 土師器・製塙土器・黒色土器・埴輪: 白抜き 瓦: 灰

本文目次

第1章 畑ヶ田遺跡とその周辺	
第1節 遺跡の立地と既往の調査	1
第2節 周辺の遺跡	1
第2章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯	3
第2節 調査の方法と経過	4
第3章 遺構検出に至るまで	
第1節 基本層序と遺構検出面	13
第2節 出土遺物	15
(1) 機械・人力掘削時	15
(2) 所属遺構が特定できないものと性格不明遺構	16
(3) IV層内もしくはその蓋然性が高いもの	17
第4章 確認した遺構と遺物	
第1節 堅穴住居	20
(1) 遺構の状況	20
(2) 出土遺物	20
第2節 掘立柱建物	22
(1) 遺構の状況	22
(2) 出土遺物	28
第3節 柱列・欄・ピット	29
(1) 遺構の状況	29
(2) 出土遺物	31
第4節 土坑	33
(1) 遺構の状況	33
(2) 出土遺物	35
第5節 溝	36
(1) 遺構の状況	36
(2) 出土遺物	36
第6章 遺構の変遷	39
付章 銭貨が埋納された甕の有機質遺体の同定分析	41

挿図目次

図1	畠ヶ田遺跡周辺の遺跡分布状況 (S = 1/10,000)	2
図2	調査位置図 (S = 1/3,000)	3
図3	調査区全体平面図 (S = 1/200)	8
図4	遺構復元図 (S = 1/200)	9
図5	調査区拡大平面図1 (S = 1/120)	10
図6	調査区拡大平面図2 (S = 1/120)	11
図7	調査区壁面図 (S = 1/40)	14
図8	機械・人力掘削時などの出土遺物 (S = 1/4)	16
図9	IV層内もしくはその蓋然性が高い出土遺物 (S = 1/4)	18
図10	竪穴住居 平・断面図 (S = 1/20)	21
図11	建物1および柱列 平・断面図 (S = 1/60)	23
図12	建物2 平・断面図 (S = 1/60)	24
図13	建物3および建物4 平・断面図 (S = 1/60)	25
図14	建物5 平・断面図 (S = 1/60)	26
図15	建物6および柵 平・断面図 (S = 1/60)	27
図16	竪穴住居、掘立柱建物の出土遺物 (S = 1/4)	29
図17	小ピット群 平・断面図 (S = 1/60)	30
図18	柱列、ピットの出土遺物 (S = 1/4)	32
図19	土坑 平・断面図および出土遺物 (S = 1/4)	34
図20	溝の出土遺物 (S = 1/4)	37

表目次

表1	遺構番号対応表	12
----	---------	----

写真目次

写真1	調査前から遺構検出まで	7
写真2	遺構検出から現地説明会まで	19
写真3	建物1の復元(東から)	38

写真図版目次

原色図版1 土坑

銭貨を入れた土師器

原色図版2 土坑

1. 土師器の出土状況（北から） 2. 土師器の出土状況（東から）

原色図版3 土坑

1. 土師器内の銭貨出土状況（北から） 2. 発見直後の銭貨の状況（北から）

原色図版4 土坑

銭貨を入れた土師器内の炭化物と堆積物

図版1 空中写真

1. 調査区全景（東から） 2. 調査区全景（南東から）

図版2 空中写真

1. 調査区全景（北から） 2. 調査区全景（北から）

図版3 空中写真

1. 調査区全景（真上から） 2. 調査区全景（北東から）

図版4 調査区壁面

1. 溝（SD 1）付近におけるⅡ区南壁の状況（北東から） 2. Ⅱ区北壁の状況（南東から）

図版5 壁穴住居

1. カマドおよび遺物の検出状況（南東から） 2. 床面確認状況（南から）

図版6 掘立柱建物・ピット

1. 建物1 完掘状況（東から） 2. I区 遺構完掘状況（東から）

図版7 掘立柱建物・ピット

1. 建物2 完掘状況（拡張前、北から） 2. II区 遺構完掘状況（北から）

図版8 掘立柱建物

1. 建物3 完掘状況（北から） 2. 建物4 完掘状況（南西から）

図版9 ピット

1. I・II区 遺構完掘状況（北西から） 2. 小ピット群 完掘状況（東から）

図版10 土坑

1. 土師器内の銭貨出土状況（北から） 2. 土師器内の銭貨出土状況（北から）

図版11 溝（SD 2）

1. 遺物の出土状況（北東から） 2. 遺物の出土状況（南東から）

図版12 出土遺物（土師器）

図版13 出土遺物（土師器、須恵器ほか）

図版14 出土遺物（須恵器）

図版15 土師器壺X線写真

1. 上から 2. 横から

第1章 畑ヶ田遺跡とその周辺

第1節 遺跡の立地と既往の調査

今回報告する畑ヶ田遺跡は、大阪平野東南部に位置する現在の富田林市に所在する。市の北東平坦部は、南北に流れる石川をはさんで古くからまちが開けたところで、特に石川西岸に形成された中位段丘上には、畑ヶ田遺跡をはじめとする多くの集落遺跡が存在する。市の南部は、金剛・葛城連峰を背景に丘陵と田園風景が広がり、西部丘陵地域は、計画的に開発されたニュータウンとなっている。

畑ヶ田遺跡の発見は、市内においては比較的新しく、1988（昭和63）年のことである。民間開発に伴う試掘調査で遺跡の存在が初めて明らかになり、一帯に残る「畑ヶ田」という小字名から畑ヶ田遺跡と命名し、弥生時代から中世にかけての集落遺跡として周知されることになった。その後、事前確認調査など小規模なものを除き、5回にわたって発掘調査を実施してきた。いずれも整理作業が完了しておらず、成果の公表に至っていないが、弥生時代、そして飛鳥から奈良時代にかけての遺構・遺物を確認している。なお、現在の遺跡範囲（図1・2）は、楕円形の東側が鍵形に飛び出したようないびつな形をしているが、これは2004年度および2008年度調査の契機となった試掘調査で、それぞれ遺跡の範囲拡大を行ったためである。

第2節 周辺の遺跡

次に、周辺の遺跡の状況を概観してみよう（図1）。畑ヶ田遺跡の南東には畑ヶ田南遺跡、東には畑ヶ田東遺跡が位置している。畑ヶ田南遺跡では、2003年度調査で掘立柱建物や道路状遺構を検出した。遺構の残存状況が悪く、詳細な所属時期は不明なもの、10世紀以前と10世紀前半の2時期に分けられる。道路状遺構については平安時代に機能していた以外は不明なもの、現在認識されている東高野街道に接する位置での検出であり興味深い【富田林市遺跡調査会 2004】。また、西側の隣接地で実施した2005年度調査では、古代に属するとみられる建物跡などを確認している【富田林市教育委員会 2009】。一方の畑ヶ田東遺跡では、1993年度調査で古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構を確認している【富田林市教育委員会 1993】。

畑ヶ田遺跡の北側に広がる中野遺跡では、後期旧石器時代の国府型ナイフ形石器が出土しているが【富田林市教育委員会 1982】、人びとの生活の痕跡を遺構から直接的に確認できるのは、弥生時代中期に入ってからである。多数のピットや集落を区画したと考えられる溝などがみつかっているほか、二上山で産出するサスカイトも多量に出土しており、市域北部に位置する喜志遺跡とともに、石器の製作を行っていた集落であることも知られている【富田林市史編集委員会 1985】。その後の遺構や遺物としては、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての掘立柱建物のほか、朝鮮半島との交流を示す新羅の土器も出土している【富田林市教育委員会 1995】。1987年から1989年にかけて大阪府教育委員会と富田林市教育委員会が行った都市計画道路（狭山河南線）に伴う調査では、飛鳥時代から室町時代にわたる大量の瓦のほか、塔の心礎石や仏像の光背らしき木製品も出土している。このことから付近に寺院が存在したと考えられ、「中野庵寺」と命名している【折河泉古代寺院研究会 2001】。この調査では、ほかにも井戸枠に瓦を転用した中世の井戸の検出や、室町時代の和鏡が2面出土するなど、多くの特筆すべき成果があがっている。

中野遺跡の西側に接する新堂廃寺は、飛鳥時代創建の寺院である。創建期は「四天王寺式」の伽藍配置と考えられるが、白鳳期に西側の谷を埋め立てて寺域を拡張し、塔と金堂の西側に西方建物が建てられ、天平期にはさらに寺域を拡張して南門や築地塀などが整備された。新堂廃寺の北西には、創建期から瓦を供給したオガニジ池瓦窯跡があり、これらを見おろす位置に、横口式石槽を主体部とする方墳のお龜石古墳が築かれている【富田林市教育委員会 2003】。お龜石古墳については、石槽を埋むように平瓦を積み上げていることが確認されており、その瓦の特徴が新堂廃寺のものと類似していることから、新堂廃寺を創建した壇越の墓との指摘もされている【大阪府教育委員会 1961】。

このほか、畠ヶ田遺跡の南側には富田林寺内町遺跡がある。16世紀半ばに宗教自治都市として成立した富田林寺内町は、江戸時代に在郷町として発達した。現在も当時の町並みをよく残しており、大阪府内で唯一の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。発掘調査では6世紀後半から末ごろの掘立柱建物も確認しており、寺内町成立以前の様相の一端が明らかになっている【富田林市教育委員会 2000】。

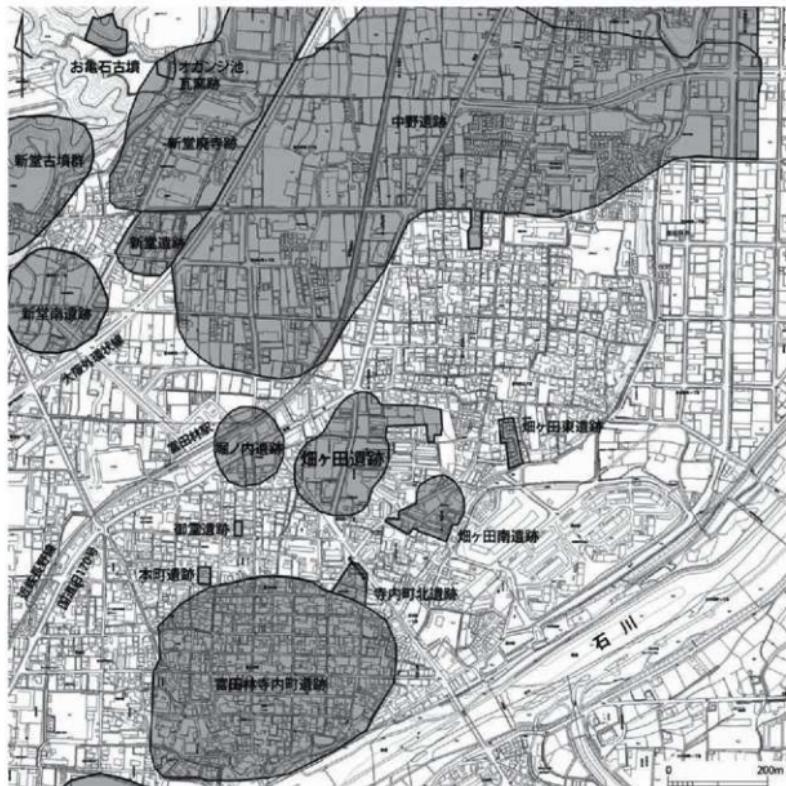


図1 畠ヶ田遺跡周辺の遺跡分布状況 (S = 1/10,000)

第2章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

富田林市では、年々高まる保育サービスへの需要に対応するため、2008（平成20）年8月に「富田林市立保育所のあり方検討委員会」を設置し、保育サービスの維持向上と効率的な保育行政の運営についての検討を行ってきた。その結果、保育所運営費の一般財源化や税収入の激減への対応、新たな子育て支援策への取り組みと拡充を図るため、公立保育所への民間活力の導入に関する指針として、2010（平成22）年9月に「富田林市立保育所民営化基本方針」を策定した。

最初に民営化の対象となったのが、若松町一丁目所在の市立みどり保育園である。みどり保育園は建物の老朽化が進んでおり、施設の更新が必要な状態であった。そこで近隣に位置する若松中央公園を建て替えの用地として、「（仮称）新みどり保育園」が建設されることになった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である畠ヶ田遺跡内であったため、2011（平成23）年5月23日付で、文化財保護法第93条に基づく発掘届出書が富田林市教育委員会文化財課に提出された。

これを受けて文化財課では、事業者および関係者と複数回にわたり協議した。過去に周辺で実施した調査の状況から、当該地には確実に遺構が存在すること、そして設計G.L.-1.8mの建物基礎がその遺構面に及ぶことは明らかであったため、建物1階面積にあたる約758m²を発掘調査の対象とした。

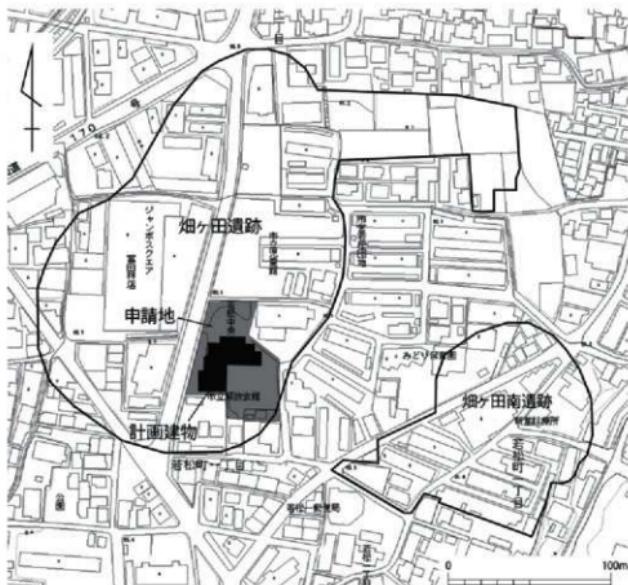


図2 調査位置図 (S = 1/3,000)

第2節 調査の方法と経過

今回の調査対象範囲は、すでに述べたように計画建物の1階の平面形に等しい。しかし、作業上のスペースの確保や安全面の問題で、調査区西側および南側の一部については、対象範囲より縮小して掘削せざるを得なかった。この漏れた範囲については、安全面に支障がない程度で、埋め戻し作業と並行しながら調査を行った。調査を進めるにあたって、調査区を東西で分割して東側をI区、西側をII区とし、埋め戻しと並行して調査した調査区西側をIII区、南側をIV区とした（図3～6）。

排土処理の都合上から、調査はI区の南東端から、II区は南西端から開始し、バックホウで掘削しながら遺構検出を進めた。遺構検出が終了した段階で、平板測量による縮尺1/100の遺構配置略図を作成し、地区や遺構の種類に関係なく遺構に通し番号をF1、F2、F3、…（Fは遺構を意味するFeatureの頭文字）と付与していった。この通し番号（F番号）は、調査後に遺構の性格付けが終了してから、本市の従来の調査方法に従い、遺構の種類ごとの通し番号（SP1、SK1など）に付け替えた。本報告で用いる遺構番号は後者であるが、現地調査で作成した実測図や写真撮影時の写し込みなどに記入している番号は前者であり、その記録を残すためにも対応関係を収録しておく（表1）。

現地調査での実測図作成にあたっては、調査区周辺の2箇所に4級基準点を新設し、調査区内には5mメッシュの杭を設けた。図面の縮尺は遺構の断面図が1/10、調査区壁面の断面図が1/20である。調査区全体はラジコンヘリによる空中写真測量を行い、縮尺1/20と1/100の平面図を作成したが、遺構細部の記録が必要な場合は、メッシュ杭を使って部分的に平面図を別途作成している。また、空中写真測量後に調査したIII区およびIV区については、平板測量で縮尺1/50の平面図を作成して空中写真測量の平面図と合成した。

現地調査は2011（平成23）年7月11日に着手し、同年8月31日に終了した。実働日数は34日であり、記録として調査日誌を下記に掲げておく。また、現地説明会を8月27日に実施し、市内外から約200名の参加が得られた。出土遺物等の整理作業は現地調査と並行して開始し、現地調査終了後も引き続き実施した。

<現地調査日誌>

7月

11日（月） 曇り一時雨 バックホウの搬入。現地で関係者と調査範囲等の確認。調査区を便宜上、I区とII区に分ける。終了後、I区の南東側より機械掘削を開始し、並行して人力掘削と精査、遺構検出を行う。平面が隅丸方形で一辺1m級の柱掘方を複数確認する。

12日（火） 曇りのち雨 引き続き、I区の機械掘削（写真1下段左）。並行して人力掘削と精査、遺構検出。午後から断続的な雨。I区の機械掘削がほぼ終了する。仮設トイレが設置される。

13日（水） 晴れ 引き続き、I区の機械掘削。並行して人力掘削と精査、遺構検出を行う。I区は午前中に機械掘削が終了したため、バックホウのみII区へ移動して南西側から掘削を行う。溝（SD1）の検出面よりやや高いレベル（IV層）で多量の土師器片が出土する。休憩用のユニットハウスが設置される。

14日（木） 晴れ 引き続き、II区の機械掘削。並行して人力掘削と精査、遺構検出を行う。排土の置き場が限界に達し、関係者と協議。来週から排土の場外搬出を行うことにする。

- 15日（金） 晴れ 排土の処理ができず、機械掘削が中断となったため、II区の遺構検出に専念する。西半分で柱掘方が並ぶのを確認（建物3）。次週に台風6号が上陸する恐れがあるため、シートで念入りに養生する。
- 19日（火） 雨のち曇り 台風接近のため作業を中止する。
- 20日（水） 曇り時々晴れ 暴風警報発令中のため、本日も作業中止。警報は11時に解除される。
- 21日（木） 曇り時々雨 排土の場外搬出を開始する。バックホウがその作業に専念することになったため、機械掘削は中断。溜まった雨水を抜きながら、II区南東部を重点的に精査し、遺構検出を行う。
- 22日（金） 曇り 引き続き、排土の場外搬出のため、機械掘削は本日も中断。II区の遺構検出を行う（写真1下段右）。カマドの痕跡とみられる焼土を確認し、写真撮影する。排土の搬出は本日で終了となる。
- 25日（月） 曇り時々晴れ II区の機械掘削を再開し、並行して人力掘削と精査、遺構検出を行う。機械掘削は本日で終了。調査区ほぼ中央で土坑状遺構（のちに性格を溝に変更、SD2）を確認（写真2上段左）。測量業者が現場の下見のために訪れる。
- 26日（火） 晴れ II区の北西側で、平面が隅丸方形で一辺1m級の柱掘方が並ぶのを確認する（建物2）。平板を用いてII区の遺構配置略図を作成する。
- 27日（水） 晴れ I区の再精査を行い、見逃した遺構の検出を行う。東側で複数確認していた一辺1m級の柱掘方は、2間×4間の掘立柱建物を構成するものと想定（建物1）。
- 28日（木） 晴れ 引き続き、I区の再精査と遺構検出を行い、ほぼ終了する。平板を用いてI区の遺構配置図を作成する。測量業者がメッシュ杭の設定と基準点測量を行う（写真2上段右）。
- 29日（金） 晴れ I区からピットの段下げを開始する。建物1付近の不定形遺構（SX11）内から、想定した位置通りにピットが現れる。

8月

- 1日（月） 曇り PL花火芸術のため、現地作業は15時までとする。ピットの段下げがI区からII区へと進む。並行してSD2の掘削を行う。
- 2日（火） 曇りのち晴れ 段下げがほぼ終了し、ピット以外の遺構の掘削を行う。夕方からはII区のピットの半裁を開始する。
- 3日（水） 曇り時々晴れ SD1の掘削と、II区のピットの半裁（写真2下段左）。SD2の写真撮影。II区南壁の断面を実測する。
- 4日（木） 晴れ 猛暑。引き続きII区のピットの半裁を行い、終了したものから断面を実測する。昨日から着手したII区南壁の断面を実測し、終了後に写真撮影を行う。
- 5日（金） 曇り時々雨 午後は断続的に雨が降り、作業を何度も中断する。建物2を構成するピットの半裁を行い、断面の写真撮影を行う。また、II区南壁の写真撮影を再度行う。II区の土坑（SK1）からほぼ完形の土器壺（遺物番号70）が据えられた状態で見つかる。内部に土器（遺物番号69）片が落ち込んでおり、本来は蓋をしていたものと想定。
- 8日（月） 晴れ 酷暑。SK1の写真撮影を行う。ピットの半裁はII区からI区へと進み、並行して断面を実測する。I区の北東側に径の小さいピットが集中する箇所があり、断面形状から杭状

- のものが打ち込まれていたと想定。午前、辻井なつみ氏（大阪府立弥生文化博物館）が来訪。
- 9日（火） 晴れ 昨日よりもさらに酷暑。引き続きI区のピットを半裁、並行して断面の実測を行う。S D 2の遺物出土状況の写真撮影を行い、終了後に平面および断面図を作成。
- 10日（水） 晴れ 暑い日が続く。I区のピットの断面を実測。建物2の写真撮影を行う。I区の小ピット群周辺を再精査し、小ピットを追加検出。建物1を構成するピットの半裁にも着手する。
- 11日（木） 晴れ I区のピットの断面を実測。SK 1の出土状況の実測によるやく着手する。
- 12日（金） 晴れ 建物1の断面を写真撮影しようとするが、陽射しがきつく途中で断念する。II区からピットの完掘を行っていく。SK 1の実測が終了し、土師器窯の内部に詰まった土を除去したところ、銭貨が4枚存在することが判明する。盆休みに入るため、入念に養生を行う。
- 15日（月） 盆休みのため作業なし。
- 16日（火） 曇り時々晴れ 午前は一時的に雨が降る。建物1の断面の写真撮影、実測を行う。ピットの完掘がII区からI区へと進む。SK 1では、精査でさらに1枚の銭貨を確認し、合計5枚となる。うち1枚には時計の6時にあたる部分に「門」の文字を読み取ることができ、和同開珎か神功開寶のどちらかと推定。写真撮影後、追加の実測を行う。
- 17日（水） 晴れ 午前にSK 1の土師器窯の取り上げ作業を行い、15時に埋蔵文化財センターへ搬出する。建物1の断面の実測を引き続き行う。
- 18日（木） 晴れ 引き続きピットの断面を実測し、終了したものから完掘していく。I区の小ピット群については、断面に加えて平面の実測も行う。空中写真測量の実施日を24日に決定。撮影用足場の組み立てを開始する。
- 19日（金） 晴れ ピットの断面実測と完掘がほぼ終了する。足場より建物1の写真撮影を行う（写真3）。
- 22日（月） 晴れ 昨夜に雨が降ったため、溜まった雨水を抜きながら遺構の白線引きを行う。
- 23日（火） 晴れ 明日の空中写真測量に向けて、掃除と遺構の白線引きを行う。
- 24日（水） 晴れ 11時～ 白線の最終チェックと、調査区の周囲から建物ごとに写真撮影。11時30分～ラジコンヘリによる空中写真測量。12時45分～足場からI区の写真撮影。終了後、記者発表のため市役所へ。14時～記者クラブにて記者発表。終了後すぐ現場に戻り、現場で取材対応。16時30分～足場からII区の写真撮影。
- 25日（木） 晴れ 昨夜の降雨で溜まった雨水を抜く。午前、岸本直文氏（大阪市立大学）が来訪。同時に現場および埋蔵文化財センターで取材対応。18時から放送のNHKニュースステラス関西で調査成果が報道される。
- 26日（金） 晴れ 読売新聞、産経新聞、日本経済新聞の朝刊に調査成果が掲載される。翌日の現地説明会に向けた準備を行う。調査区北壁の断面を実測する。
- 27日（土） 晴れのち雨 每日新聞の朝刊に調査成果が掲載される。7時45分～現地説明会の準備。10時～現地説明会を開始、12時に終了。約200名の参加を得る。中村 浩氏（大阪大谷大学教授）、小浜 成氏（大阪府教育委員会）、近藤康司氏（堺市教育委員会）、白石耕治氏（和泉市教育委員会）、家原圭太氏（京都市文化市民局）が来訪。撤収後の13時30分～I区のカマドとみられる焼土周辺の再精査に着手するが、すぐに雨のため退避。やがて激しい雷雨となり、調査区は雨水で水没したため作業終了。

28日（日）朝日新聞に調査成果が掲載される。

29日（月）晴れ 淀まった雨水を抜くとともに、調査区の北側から埋め戻しが始まる。I区の焼土周辺を再精査し、堅穴住居（S I 1）と認定。すぐに遺構掘削と写真撮影、実測を行う。床面直上で須恵器坏身（遺物番号37）が出土。

30日（火）晴れ 埋め戻しが進む。S I 1の完掘。建物2の西側を掘削し（III区とする）、柱穴の続きを検出したため、すぐに半裁、断面の実測を行い、完掘する。平板で平面図を作成し、終了後すぐに埋め戻し。休憩用のユニットハウスが撤去される。

31日（水）晴れ 埋め戻しを行いながら、SK 1の南側を掘削するものの（IV区とする）、顯著な遺構は確認できず。しかし、調査序盤の機械掘削時と同様、IV層から多量の遺物が出土する。平板で平面図を作成し、終了後すぐに埋め戻し。また、下層確認のため、II区で遺構検出面より深さ約1mまで掘削し、明褐色砂礫が続くことを確認。現場に残った堆土分の埋め戻しが完了し、バックホウ搬出。現地作業は本日をもって終了となった。



写真1 調査前から遺構検出まで
(上段：調査前 下段左：機械掘削 下段右：遺構検出)

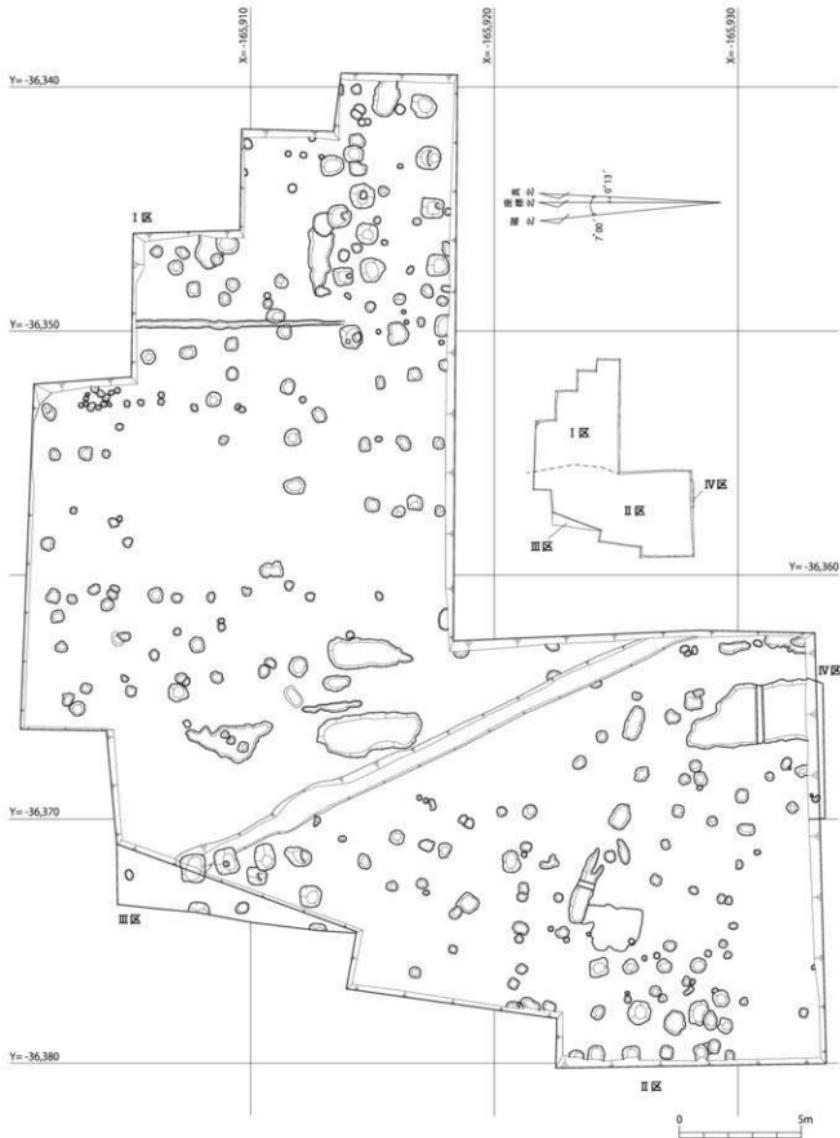


图3 调查区全体平面图 ($S = 1/200$)

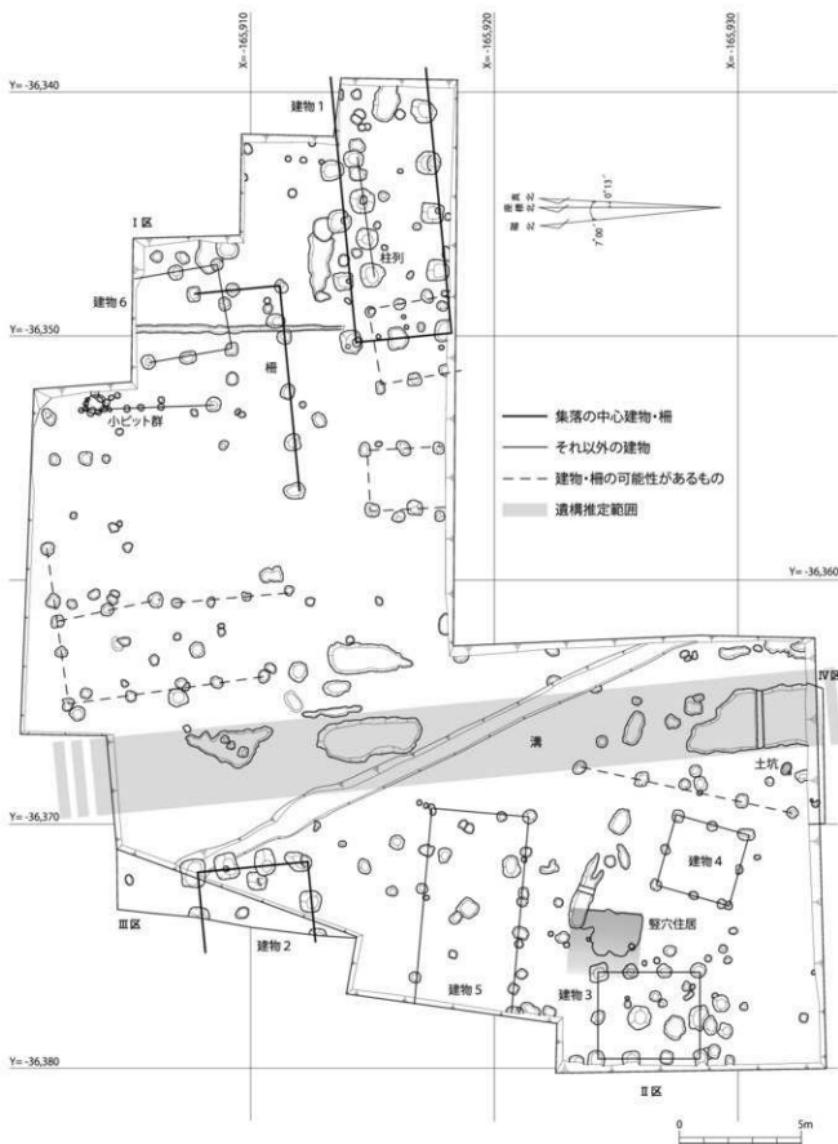


図 4 遺構復元図 ($S = 1/200$)

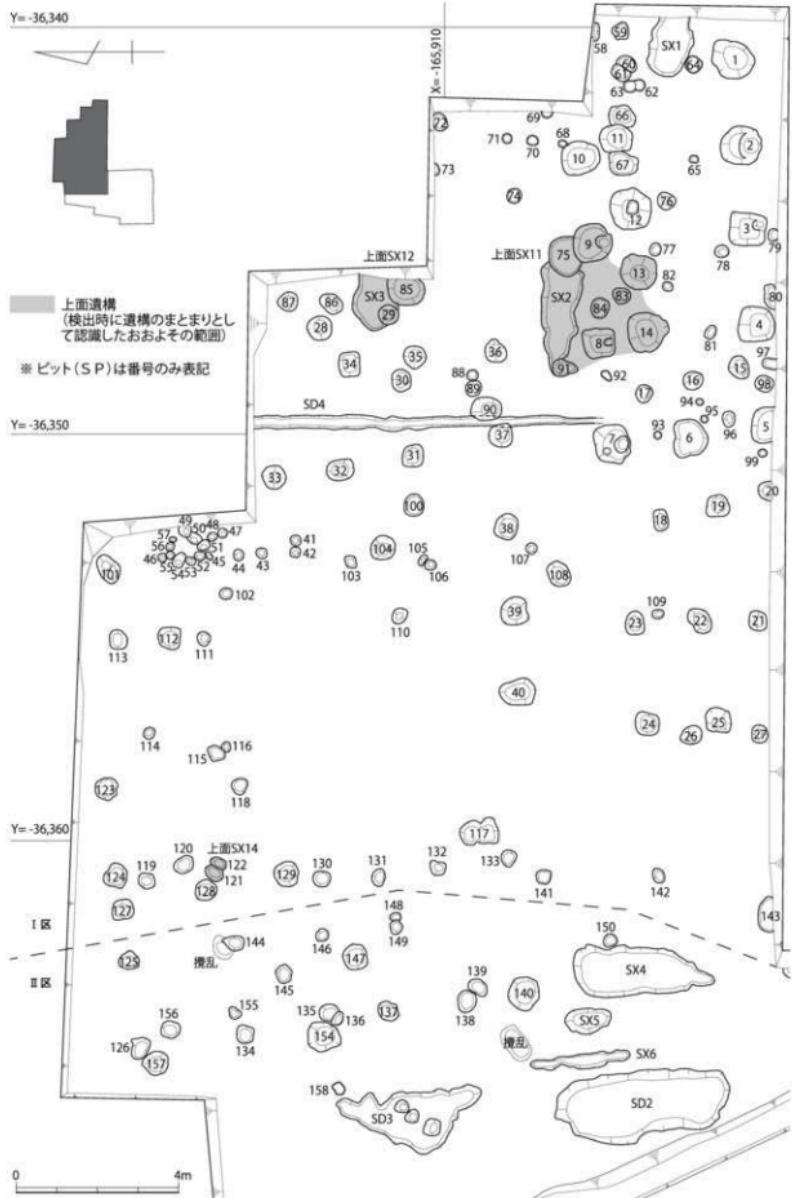


図5 調査区拡大平面図1 (S = 1/120)

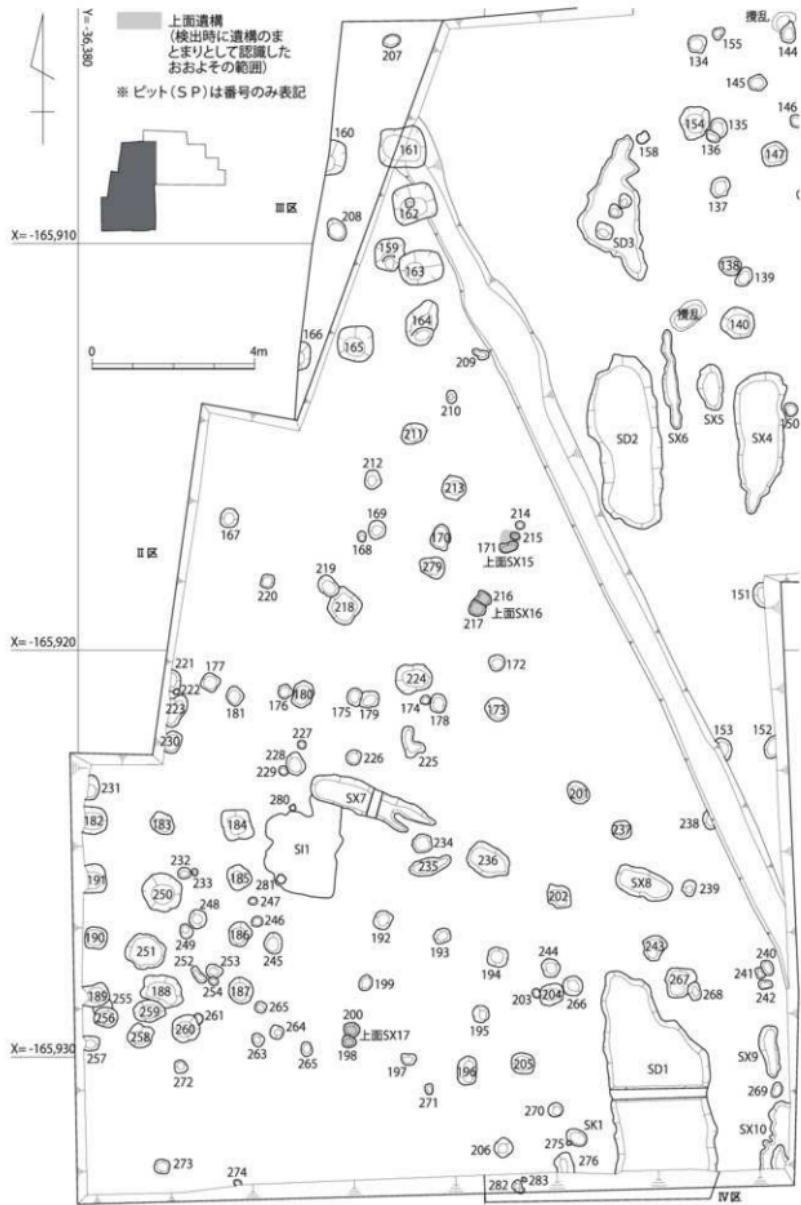


図6 調査区拡大平面図2 (S = 1/120)

表1 遺構番号対応表

性格別	通し(F)	地区	備考	性格別	通し(F)	地区	備考	性格別	通し(F)	地区	備考
SP1	9	I		SP83	273	I		SP161	155	II・III	
SP2	10	I		SP84	272	I		SP162	156	II	
SP3	11	I		SP85	288	I		SP163	157	II	
SP4	12	I		SP86	34	I		SP164	158	II	
SP5	13	I		SP87	35	I		SP165	159	II	
SP6	14	I		SP88	36	I		SP166	297	III	
SP7	15	I		SP89	37	I		SP167	167	II	
SP8	93	I		SP90	38	I		SP168	168	II	
SP9	97	I		SP91	95	I		SP169	169	II	
SP10	18	I		SP92	28	I		SP170	170	II	
SP11	1	I		SP93	64	I		SP171	285	II	
SP12	17	I		SP94	126	I		SP172	177	II	
SP13	16	I		SP95	127	I		SP173	178	II	
SP14	92	I		SP96	65	I		SP174	181	II	
SP15	25	I		SP97	67	I		SP175	278	I	
SP16	26	I		SP98	66	I		SP176	185	II	
SP17	27	I		SP99	128	I		SP177	187	II	
SP18	63	I		SP100	300	I		SP178	179	II	
SP19	62	I		SP101	292	I		SP179	277	I	
SP20	61	I		SP102	284	I		SP180	184	II	
SP21	58	I		SP103	103	I		SP181	186	II	
SP22	59	I		SP104	50	I		SP182	250	II	
SP23	60	I		SP105	102	I		SP183	248	II	
SP24	55	I		SP106	99	I		SP184	245	II	
SP25	57	I		SP107	104	I		SP185	244	II	
SP26	56	I		SP108	52	I		SP186	241	II	
SP27	90	I		SP109	129	I		SP187	239	II	
SP28	33	I		SP110	96	I		SP188	255	II	
SP29	289	I		SP111	106	I		SP189	260	II	
SP30	31	I		SP112	71	I		SP190	253	II	
SP31	40	I		SP113	105	I		SP191	251	II	
SP32	41	I		通し重複 (SP125)				SP192	232	II	
SP33	42	I		SP114	131	I		SP193	233	II	
SP34	32	I		通し重複 (SP125)				SP194	274	II	
SP35	30	I		SP115	72	I		SP195	227	II	
SP36	29	I		SP116	130	I		SP196	228	II	
SP37	39	I		SP117	287	I		SP197	229	II	
SP38	51	I		SP118	73	I		SP198	303	II	
SP39	53	I		SP119	76	I		SP199	231	II	
SP40	54	I		SP120	78	I		SP200	304	II	
SP41	49	I		SP121	276	I		SP201	198	II	
SP42	48	I		SP122	275	I		SP202	221	II	
SP43	47	I		SP123	74	I		SP203	219	II	
SP44	46	I		SP124	75	I		SP204	218	II	
SP45	45	I		通し重複 (SP114)				SP205	216	II	
SP46	110	I		SP125	131	II		SP206	214	II	
SP47	293	I		通し重複 (SP114)				SP207	299	II	
SP48	294	I		SP126	136	II		SP208	298	II	
SP49	283	I		SP127	77	I		SP209	161	II	
SP50	291	I		SP128	79	I		SP210	162	II	
SP51	282	I		SP129	81	I		SP211	163	II	F164と 同一
SP52	281	I		SP130	82	I		SP212	165	II	
SP53	108	I		SP131	83	I		SP213	166	II	
SP54	280	I		SP132	84	I		SP214	279	I	
SP55	109	I		SP133	85	I		SP215	286	II	
SP56	111	I		SP134	5	II		SP216	305	II	
SP57	290	I		SP135	141	II		SP217	306	II	
SP58	118	I		SP136	142	II		SP218	175	II	
SP59	119	I		SP137	4	II		SP219	174	II	
SP60	7	I		SP138	144	II		SP220	173	II	
SP61	120	I		SP139	145	II		SP221	189	II	
SP62	6	I		SP140	146	II		SP222	188	II	
SP63	121	I		SP141	86	I		SP223	190	II	
SP64	122	I		SP142	87	I		SP224	180	II	
SP65	123	I		SP143	91	I		SP225	182	II	
SP66	21	I		SP144	132	II		SP226	183	II	
SP67	20	I		SP145	271	II		SP227	192	II	
SP68	117	I		SP146	133	II		SP228	194	II	
SP69	116	I		SP147	135	II		SP229	193	II	
SP70	115	I		SP148	301	II		SP230	191	II	
SP71	114	I		SP149	134	II		SP231	249	II	
SP72	113	I		SP150	148	II		SP232	247	II	
SP73	112	I		SP151	154	II		SP233	246	II	
SP74	70	I		SP152	302	II		SP234	224	II	
SP75	98	I		SP153	195	II		SP235	223	II	
SP76	8	I		SP154	140	II		SP236	222	II	
SP77	124	I		SP155	139	II		SP237	197	II	
SP78	22	I		SP156	137	II					
SP79	295	I		SP157	138	II					
SP80	68	I		SP158	143	II					
SP81	23	I		SP159	160	II					
SP82	24	I		SP160	296	II					

第3章 遺構検出に至るまで

第1節 基本層序と遺構検出面

今回の調査区における基本層序は、大きく分けて6つの層に分類できる。確認した土層の状況をもとに、土地利用の変遷をみていきたい。

比較的擾乱を受けていないⅡ区南壁（図7下段、図版4上段）でみると、現在の地表面となっている腐植土および盛土層（I層）は、厚さ約70cmに及び、公園造成時に盛り上げられたものと考えられる。大半は真砂土であるが、調査区西側では耕作土を寄せたと考えられる層（土層番号⑯、⑰）もある。公園以前は耕作地として利用されており、旧耕作土層が2面、旧床土層が1面認められる。調査区西半分に認められる旧耕作土・床土層をⅡ層、地形が下降している関係で東半分に認められる旧耕作土層をⅢ層とした。Ⅱ区には、北西から南東へ延びる公園の排水管があつて、設置のための掘削は地山面にも及んでおり、遺構の一部を損壊している。

これらの層を取り除いて初めて、遺跡の存在を示す痕跡が現れる。灰黄褐色粘質土層（IV層、土層番号⑩）は多量の土器片を含む包含層であるが、Ⅱ区南東隅付近に限って認められ、溝（SD1）やピット（SP276）を覆うようにして広がっていた。類似した灰黄褐色粘質土層（土層番号⑪～⑬）はその直下にも認められたが、IV層に比べると含まれる礫の量が多く、遺物を含まないこと、また、地山と判断した明褐色砂礫層（土層番号⑭、VI層）と土色で区別できることから、V層とした。

このV層は調査区全体に認められるが、厚さについては幅がある。Ⅱ区南壁においては、平均10cm前後で推移し、薄い部分では2cm、厚い部分では20cm程度であることを確認できる。Ⅱ区の北壁から西壁にかけては比較的厚く、平均20cm前後で推移し、厚い部分では30cm程度に及ぶ。

さて、V層の取り扱いについては、機械掘削開始直後から問題となった。諸般の事情により事前調査を実施できなかったため、南側に隣接する2005年度調査区の調査成果に従い、地山面での遺構検出を予定していたからである。V層の上面で遺物を確認したため、そこで遺構検出を試みようとしたが、作業が難航した。遺物を含む範囲とV層の土色・土質が類似しており、遺構が存在するのか、もしくは包含層なのかの判断ができなかつたのである。やがてV層そのものには遺物が含まれず、遺物を含む箇所は遺構であることが明らかになったが、やはり遺構検出が困難であり、機械掘削はV層を一定の深さで削り込む形で進めた。しかし、V層を残した状態では遺構の正確な輪郭をつかむことができず、検出漏れの懸念があったため、最終的には人力で除去し、VI層（地山）上面で遺構検出せざるを得なかつた。すべての遺構検出後、調査区壁面を利用して断面観察できたものについては、すべてV層上面から掘り込まれていることが辛うじてわかつたため、今後の周辺での調査方法に課題を残す結果となつた。

V層が人為的な整地によってできた層かどうかについては、結論は出ていない。今回の調査地は石川西岸の中位段丘上に位置しており、地山面は石川のある南東に向かって緩やかに下降している。Ⅰ・Ⅱ区北壁（図7上段、図版4下段）をみると、V層（土層番号⑩、⑪）は標高の高い西側の方が厚くなつておらず、Ⅱ区南壁においてはほぼ均一に認められる。このことから、傾斜を克服するような性格としての整地は考えにくい。また、Ⅱ区北壁の西端をみると、VI層が周辺地形に反して1段下がつておらず、それを埋めるようにしてV層（土層番号⑪）が認められる。繰り返しになるが、VI層と同様に

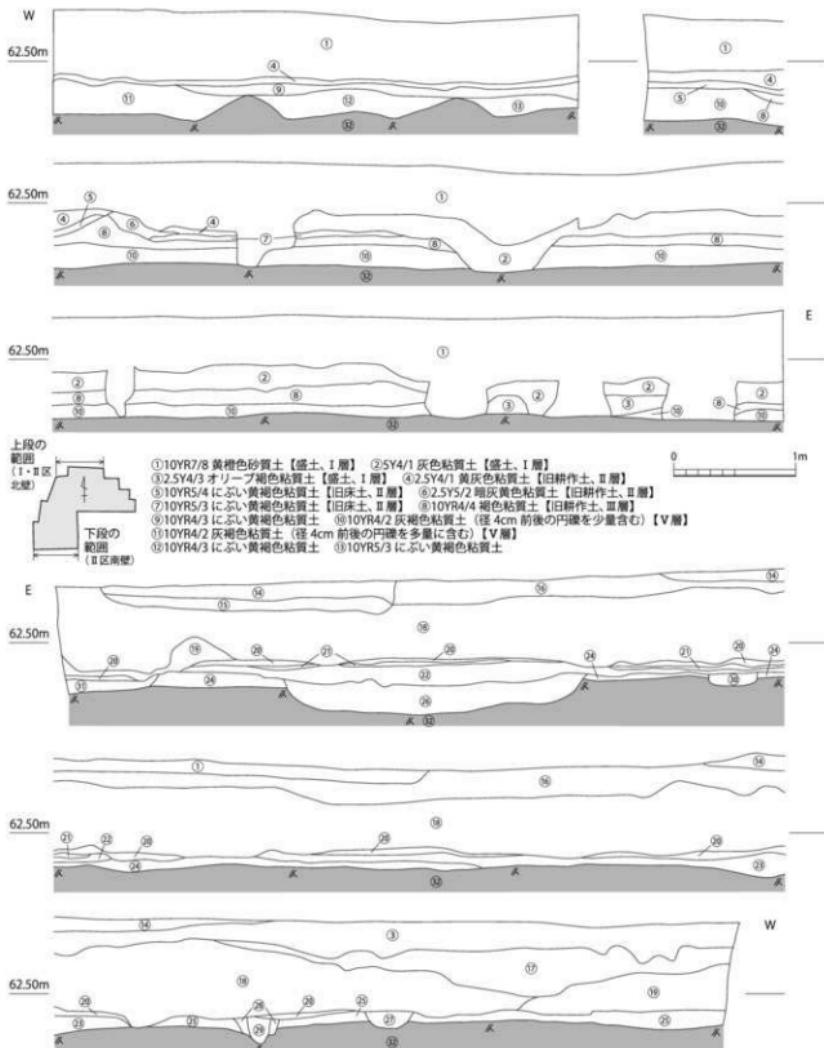


図7 調査区断面図 (S = 1/40)

礫を多く含み、比較的堅固な層であること、遺物を含まない層であることを考えると、この段差を人為的な所産と考えるよりも、地山として扱う方が適当かもしれない。今回は便宜上、堆積層と呼んでおくこととする。

なお、確認した遺構は堅穴住居、ピット、土坑、溝など約300基である。次章では図4で示した遺構復元図に従い、遺構の種類ごとに報告を行っていくが、その前に遺構検出に至るまでに出土した遺物をみていきたい。

第2節 出土遺物

(1) 機械・人力掘削時

機械・人力掘削時に、土師器、須恵器、磁器、瓦が出土している。図示したものについて出土状況を示しておくと、遺物番号1・9はII区北半分の人力掘削時、2・3はII区の機械掘削時、4はI区の機械掘削時、5・6はII区の人力掘削時、7はII区南半分の人力掘削時、8はII区の人力掘削時である(図8、図版13)。

土師器 1は口径7.2cm、肩部径7.9cm、残存器高5.2cmを測る小型の壺である。逆「く」の字状に屈曲して張る肩部から、わずかに開きながら、短く立ち上がる口頸部をもつ。口縁端部は尖り氣味におさまる。2は高壺の脚柱部で、半中実の脚柱部からなだらかに開く裾部をもつ。脚中央部幅2.6cm、残存器高7.0cmを測る。外面は10面程度の面取りがおこなわれ、内面にはしばり目が明瞭に観察できる。3は高壺の壺部片で、板状に近い浅い壺部をもつ。口径27.6cm、残存器高2.3cmを測る。

須恵器 4の壺蓋はわずかに丸みをもつ天井部に、屈曲してわずかに内傾氣味に垂下する口縁部をもつ。口径15.0cm、残存器高2.1cmを測る。天井部外面の2/3の範囲には回転ヘラ削り調整が施されている。ロクロの回転方向は時計回りである。5の壺蓋は、平らに成形された天井部から下方へ直角に折れ曲がる口縁部をもつ。おそらく扁平な宝珠形のつまみがつけられていたと推測できるが、欠失している。口径17.9cm、残存器高1.4cmを測る。天井部外面の2/3の範囲に回転ヘラ削り調整が、内面には回転ナデ調整の後に不定方向のナデ調整が付加されている。ロクロの回転方向は時計回りである。6の壺身は扁平な体部から、つまみ上げるような立ち上がりをもつ。口径11.9cm、受部径14.1cm、立ち上がり高1.0cm、残存器高2.9cmを測る。体部外面の約2/3の範囲に回転ヘラ削り調整が施されている。ロクロの回転方向は時計回りである。7の壺は口径21.1cm、頸基部径16.4cm、頸部高3.9cm、残存器高4.3cmを測る中型である。口縁部は外傾して開き、端部は外方へ肥厚して丸くおさまる。頸部外面はカキ目調整を施す。8の壺は、体部から底部にかけて残存する高台をもつ壺である。高台径9.9cm、高台高0.8cm、残存器高5.9cmを測る。高台は貼り付けである。体部外面は回転ヘラ削り調整が施されている。ロクロの回転方向は時計回りである。

瓦 9の平瓦は、凸面が繩目叩き調整で成形されている。繩目の叩き板は「6~7粒/5cm」の右撲りの繩が10本程度、等間隔に巻きつけられた細長い長方形の板であったことが想定される。間隔をあけて叩き締められている。凹面は、布目がナデ消されて観察できないことから一枚作りであったことがわかる。

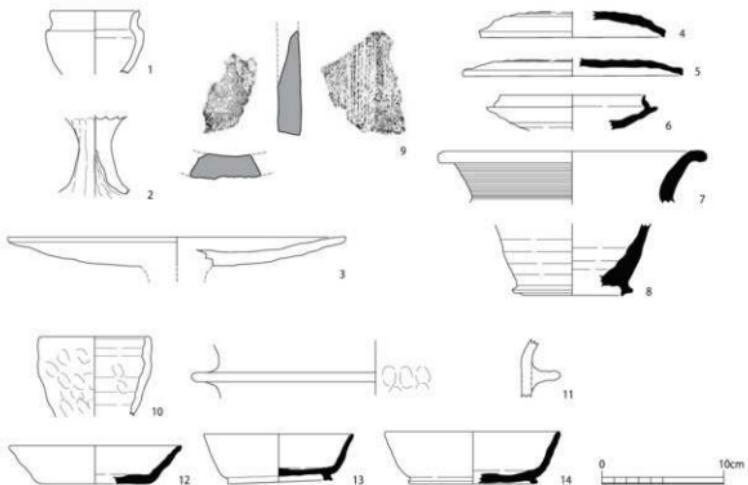


図8 機械・人力掘削時などの出土遺物 ($S = 1/4$)

(2) 所属遺構が特定できないものと性格不明遺構

遺構検出を進めるなかで、遺構と同色の土が広範囲に広がったもの (SX 11、12) や、本来の遺構の肩部が崩れて隣接する遺構と一体化してしまったもの (SX 13～17) を確認した。これらは上面の段下げを行うことで、複数のピットに分かれることが明らかになったが、段下げ中に採取した遺物のほとんどは、どのピットに属していたものか特定できなかった。そこで、検出時に遺構として捉えた範囲を「上面遺構」と称して遺構番号を付与し、付け替え時に SX として取り扱うことにした。SX 11～17については、空中写真測量時にはその輪郭が失われていたため、おおよその範囲をトーンで示している (図5、6)。

ここで紹介するのは、その SX 11 (遺物番号 10・11・13) と SX 12 (14) に加えて、SX 7 (12) の出土遺物である (図8、図版13、14)。製塙土器、土師器、須恵器がある。

製塙土器 10は口径8.9cm、残存器高6.5cmを測る、薄手のものである。

土師器 11は羽釜で、鈔部から頸部にかけて残存している。いわゆる生駒西麓産の胎土をもつ長胴の羽釜である。鈔部径30.1cm、鈔部幅2.8cm、残存器高4.7cmを測る。

須恵器 すべて环身である。12は平底から大きく外傾して開く口縁部をもつ。口径14.0cm、器高3.1cmを測る。底部外面はヘラ切り未調整で、内面には回転ナデ調整の後、不定方向のナデ調整を付加する。ロクロの回転方向は時計回りである。13は直線的に外傾した後、わずかに外反して開く口縁部をもつ环身で、高台が貼り付けられている。口径12.2cm、器高4.1cm、高台径8.6cm、高台高0.6cmを測

る。底部内面に不定方向のナデ調整が付加されている以外は、すべて回転ナデ調整が施されている。14は直線的に外傾して開く口縁部をもち、底部には高台が貼り付けられている。口径14.3cm、器高4.3cm、高台径10.6cm、高台高0.4cmを測る。底部外面はヘラ切り未調整、内面は回転ナデ調整の後、一定方向のナデ調整を付加する。ロクロの回転方向は反時計回りである。

(3) IV層内もしくはその蓋然性が高いもの

製塙土器、土師器、カマドの焚口飾り、須恵器、瓦が出土している(図9、図版13、14)。遺物番号15~25はII区の機械掘削時、26~32はIV区の機械掘削時に出土し、それぞれIV層に含まれていた蓋然性が高いと考えられるものである。後述するようにIV層と溝(SD1)は土質、土色が類似しており、遺物の取り分けが難しい状況であったため、溝(SD1)の遺物が混入している可能性がある。それらに対し、33・34についてはII区の人力掘削時に出土し、確実にIV層に含まれていたとみなせるものである。

製塙土器 図示した15~20・26・27以外にも多く出土しているが、小破片になっていて、全体の形状が分かることはなく、その個体数を数えることはできなかった。

カマドの焚口飾り 21は全体の形状がわからないものの、残存部位の平坦さと凸帯の状況から、カマドの焚口飾りと想定した。厚さ1.4cmの平坦な板に、幅2.0cm、高さ1.1cm以上の凸帯が貼り付けられている。

土師器 28は高壇の中空の脚柱部片で、9面に面取りされている。脚柱部はほぼ同じ太さで延びて、裾部で屈曲して大きく開く。脚柱部径5.0cm、残存器高15.7cmを測る。

須恵器 30の坏蓋は、口縁部と天井部の境目が不明瞭なドーム状の形態をもつ。口径13.5cm、残存器高2.7cmを測る。天井部外面には回転ヘラ削りが施されている。ロクロの回転方向は反時計回りである。31は、扁平気味の宝珠形つまみが貼り付けられた坏蓋である。つまみ径2.5cm、つまみ高0.8cm、残存器高1.4cmを測る。天井部外面は回転ヘラ削り調整、内面は回転ナデ調整の後、一定方向のナデ調整が施されている。ロクロの回転方向は反時計回りである。32は口径22.6cm、頸基部径18.5cm、頸部高4.9cm、残存器高8.8cmの中型の壺である。口縁部は外傾して開き、端部は面をもたずに丸くおさまる。体部外面は平行叩き調整のカキ目調整を施す。内面には同心円文叩き目をナデ消している。33は扁平な宝珠形つまみが貼り付けられた坏蓋である。わずかに丸みをもつ天井部に、屈曲して内傾気味に垂下する口縁部をもつ。口径13.6cm、器高2.1cm、つまみ径2.7cm、つまみ高0.5cmを測る。天井部外面の2/3の範囲には回転ヘラ削り調整が、内面は回転ナデ調整の後、不定方向のナデ調整が施されている。ロクロの回転方向は時計回りである。34は口径12.7cm、器高7.5cmの小型壺で、平底で、「く」の字状に屈曲して張る肩部から、大きく開く口頸部をもつ。口縁端部は上方に折り曲げられ、断面は三角形状を呈する。底部付近は回転ヘラ削り調整が施されていたようであるが、その後にナデ調整が付加されたため不明瞭になっている。

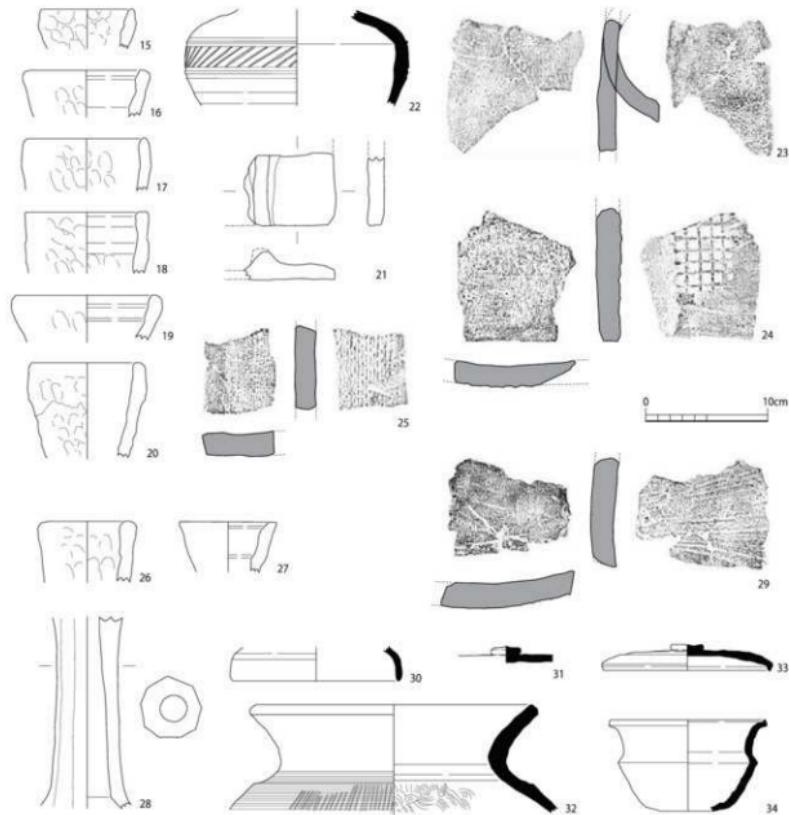


図9 IV層内もしくはその蓋然性が高い出土遺物 ($S = 1/4$)

瓦 23は丸瓦、24・25・29は平瓦である。23は、おそらく玉縁式丸瓦と想定される。型本に被せられた布は、3cm四方あたりに縦糸20本、横糸20本を数える。凸面は縫目叩き調整が観察できるが、成形後にスリ消されているため、縫目叩きの原体は不明である。24の凸面はナデ調整の後、正格子叩き目調整で叩き締められている。叩き板の原体は不明であるが、1コあたり約0.7cm四方の正格子として認める。格子3個分を1単位とするとき、単位あたりの刻線(瓦では突線)の長さは、縦が約3.4cm、横が約3.5cmである。それらの格子を作り出すために、縦横に交差して刻線が刻みこまれるが、縦の刻線、横の刻線とも幅約0.4cmで、ほぼ同じ深さで刻まれ、それぞれがほぼ一直線に通る。凹面には桶に被せられた布の痕跡が確認できるが、布目は3cm四方あたりに縦糸16本、横糸16本を数える。桶巻作りであったことは、粘土板の重ね目が「S型」として観察できることからわかる。25は凸面

が縄目叩き調整で成形されている。縄目は「6～7粒／5cm」の右撲りの縄が等間隔に巻きつけられた叩き板であることがわかる。ただし、破片であるため、原体の構成は明らかではない。凹面には、3cm四方あたりに縦糸20本、横糸16本を数える布目が観察できる。おそらく一枚作りであろう。

29の凸面は、平行叩き調整で成形されている。叩き板の原体は不明であるが、平行線の幅は約3mmを測る。凹面はすり消されて、布目なども観察できることから、一枚作りがあったことが窺える。



写真2　遺構検出から現地説明会まで

(上段左：遺構検出　上段右：基準点設置　下段左：遺構掘削　下段右：現地説明会)

第4章 確認した遺構と遺物

第1節 堅穴住居

(1) 遺構の状況

建物3として復元した掘立柱建物の東側に位置する(図版5)。カマドや壁溝の一部とみられる遺構の存在から、堅穴住居(S I I)と判断した(図10)。遺構検出時には、径60cm程度の範囲で炭と焼土が広がり、東側を除く3方を囲むようにして黄褐色粘質土(土層番号③、④)が認められた。さらに、その外側には褐灰色粘質土が不定形に広がっていたことから、東辺にカマドをもつ堅穴住居の一部が残存していると推定した。黄褐色粘質土はカマドの構築材と考えられたため、精査を行って原位置のものとそうでないものの判別を試みたが、残存状況が悪いこともあり面的に形状を認識することができなかった。そこで、カマドの長軸(東西)方向とそれの直交(南北)方向に畦畔を設けて、土層の断面観察から形状の把握に努めることにした。

まず、南北方向に設定した畦畔の断面(B-bライン)をみると、黄褐色粘質土(土層番号③)は地山面に堤状に積まれているが、残存高は最大でも5cm程度である。それに挟まれた範囲は地山が埋んでおり、灰を含む土(土層番号②)、焼土(土層番号①)の順に堆積している。堤状の黄褐色粘質土は、カマドの両袖部であろう。それに対して東西方向に設定した畦畔の断面(A-aライン)では、灰、焼土が堆積した後に黄褐色粘質土(土層番号④)が被さったような状況であり、崩落した構築材ではないかと考えられる。黄褐色粘質土や灰、焼土をすべて取り除いて確認したカマド全体の掘形は、東西方向が約85cm、南北方向が約60cmで、残存する床面(VI層)からの深さは約6cmである。なお、カマドの南側の袖部に接する位置で、須恵器壊身(図16の遺物番号37)が出土した。口縁部は全体の1/2周ほどしか残存していないかったものの、床面に置かれたような状態であり、廃絶時に残されたものと考えられる。

壁溝と考えられる溝は、最大で幅約17cmで、東辺および東辺から南辺にかけての一部を検出できた。深さは約5cmである。カマドが東辺の中央に設置されていたのであれば、堅穴住居の南北幅は2.9m程度に復元できる。カマド部分を除く堅穴住居全体を覆っていた褐灰色粘質土(土層番号⑤)については、検出時は貼床である可能性も考えていた。しかし、壁溝はそれを除去して初めて検出でき、南北方向の畦の断面をみても、壁溝の埋没後に堆積していることを確認できるので、堅穴住居の廃絶後に堆積したものと判断した。

また、ピットを2基(SP280、281)確認している。東辺の壁溝に対してほぼ平行して南北に並ぶことから、主柱穴を構成するピットである可能性も考えられる。SP280は径約15cm、深さ約4cmで、褐灰色粘質土の広がりに接する位置で検出した。SP281は径約22cm、深さ約7cmで、褐灰色粘質土(土層番号⑤)を取り除いたVI層上面で検出した。

(2) 出土遺物

土師器、須恵器が出土している(図16、図版14)。ただし、36の須恵器は、後述する建物3に属するS P 184からの出土である。堅穴住居の範囲を復元的に考えると、S P 184はそのなかに位置するため、堅穴住居廃絶後にS P 184が掘り込まれたと考えられる(図4、6)。36は所属時期から判

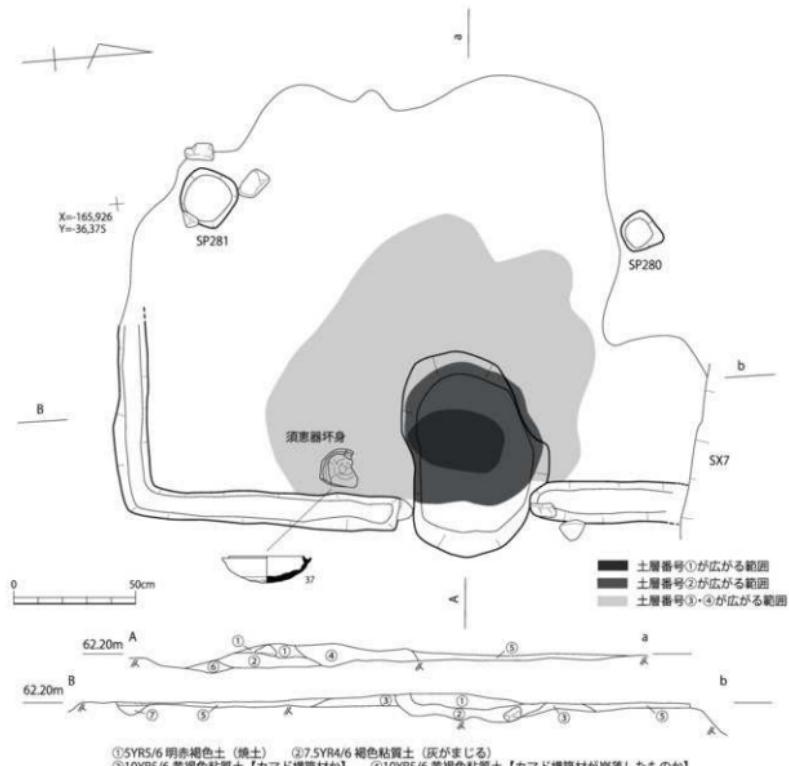


図10 堪穴住居 平・断面図 (S = 1/20)

断して、本来は堪穴住居の埋土内にあったものが、SP 184 の掘削時（もしくは廃絶時）に混入した蓋然性が高いと判断し、ここで触ることにした。

土師器 35 の壺は、小破片からの復元による作図である。口径 12.1cm、残存器高 3.8cm を測り、直立する口縁部をもつ。口縁部内面には炭化物質の付着が観察できる。

須恵器 36 の壺身は、天井部と口縁部の境目のないドーム状の形態をもち、口径 14.6cm、残存器高 3.3cm を測る。天井部の 3 / 4 の範囲にヘラ削り調整が施されている。ロクロの回転方向は反時計回りである。前述したように、SP 184 からの出土である。37 の壺身は、床面に置かれたような状態で出土したもので、口径 12.1cm、器高 4.4cm、立ち上がり高 0.6cm、受部径 14.6cm を測る。立ち上がりが矮小化しているが、貼り付けによって作り出されている。受部は上向きにつまみあげている。

底部外面の回転ヘラ削り調整は粗雑で、削りの範囲は全体の約1/2である。ロクロの回転方向は時計回りである。

第2節 堀立柱建物

(1) 遺構の状況

建物1 S P 1～10と調査区外のピットで構成される(図11、写真3、図版6上段)。遺構検出時はS X 1をS P 6に対向する梁行の柱の掘方と考えていたが、検出面からの深さが15cmと浅く、底面の中心が東側にずれているため、桁行の柱は調査区外に延びていると判断し、東西5間以上、南北2間とした。ただし、S P 6も深さ約15cmで他のピットに比べると浅く、復元に課題を残している。

掘方の平面形は隅丸方形で、一辺は80cm～1mである。柱痕跡はS P 2、3、7、8、9で見出すことができ、S P 7は掘方埋土と底面、それ以外は底面のみで確認した。柱痕跡は径20～25cmで、すべて掘方の中心ではなく南側に寄っており、柱は掘方の壁に接するように建てられていたことがわかる。S P 7以外についても、掘方埋土に柱痕跡が残っていた可能性はあったと考えているが、掘方の検出時には柱痕跡を見出せず、柱位置が掘方の端に寄っていることを想定していなかったため、それらを通るような断面観察の設定を行うことができなかつた。

そこで、柱列での掘方の断面図を完掘後に作成した。それをみると、掘方の深さは一定でないが、柱痕跡の部分が掘方の底面よりも深くなっている、その深さは検出面から50～60cmとほぼ揃っていることが分かる。VI層は堅固なため柱部分が沈下したとは考えにくく、半打ち込み式によって建てられていた可能性も考えられるだろう。

柱痕跡がない掘方についても、同じ位置に柱があったとすれば、桁行の柱間は西から順に約2.5m、2.5m、2m、2.2mとなり、一定でなかったことになる。梁行については、S P 6に問題はあるものの約2mとなる。

建物2 空中写真測量時にはS P 161～165の確認にとどまり、南北3間以上、東西1間以上としかわからなかつたが、埋め戻し前のⅢ区の調査でS P 160、166を追加で確認し、南北が3間であることが確定した(図12、図版7上段)。東西は2間まで確認でき、さらに西側へ延びるかどうかは不明であるが、南北の柱間の間隔が短いことを考慮し、桁行3間、梁行2間と復元した。

建物1と同じく掘方の平面形は隅丸方形で、一辺は80cm～1mである。S P 162～164の3基で柱痕跡を確認した。建物のコーナーにあたるS P 164では、掘方埋土に長軸約40cmの柱痕跡があり、底面には径約25cmの平らな石が据えられていた。この石は柱痕跡の中心ではなく、北東方向にずらして据えられていることから、礎石ではなく柱を固定するための役割を果たしていたのであろう。掘方埋土における柱痕跡はS P 163にも認められたが、その径は約20cmで半分ほどである。S P 162の柱痕跡は底面に認められ、径約20cmである。これらから柱の位置を復元すると、南側に寄っているS P 164を除けば、掘方のほぼ中心に建てられていたと考えられる。柱間については桁行が約1.5～1.6mで、梁行は推定で約1.7mとなる。

この建物2については、一部のピットが調査区の壁面にかかっており、遺構面の詳細な観察を行うことができた。S P 161は公園の排水管によって一部が攪乱されているが、V層上面から掘り込まれていることがわかる。この状況は、拡張区であるⅢ区で検出したS P 160とS P 166でも確認するこ

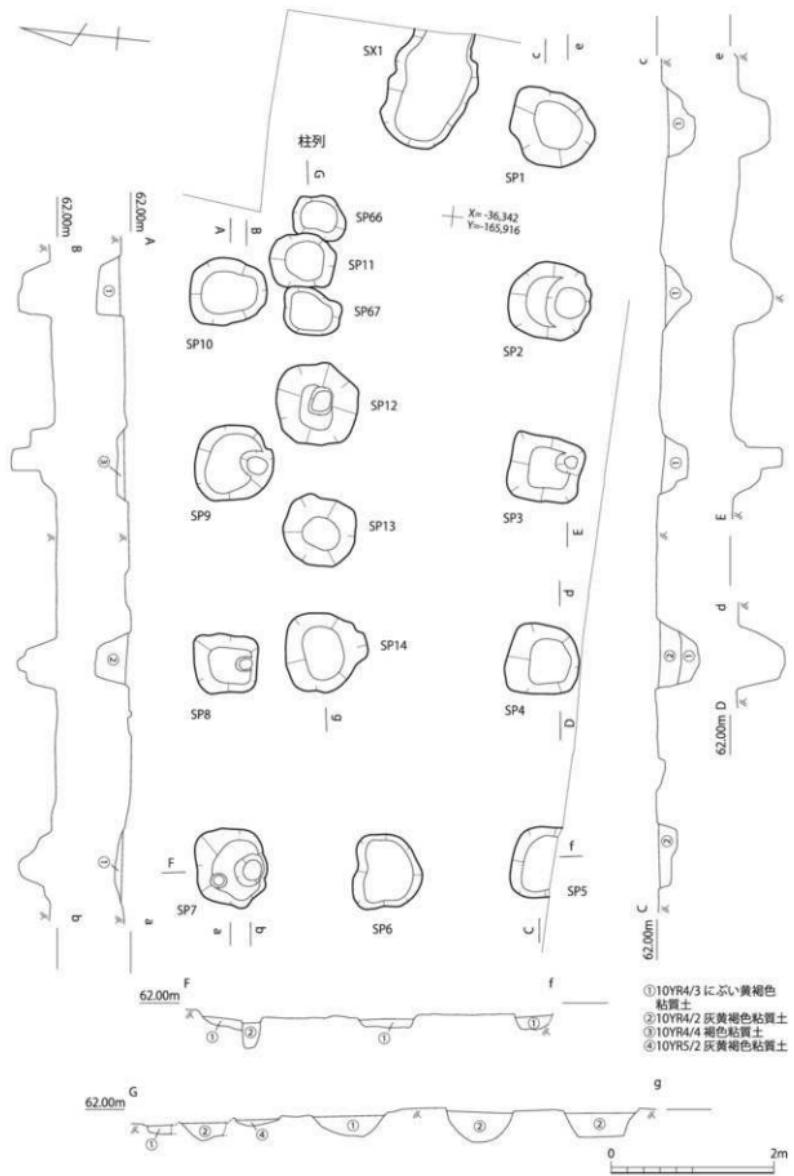


図 11 建物 1 および柱列 平・断面図 ($S = 1/60$)

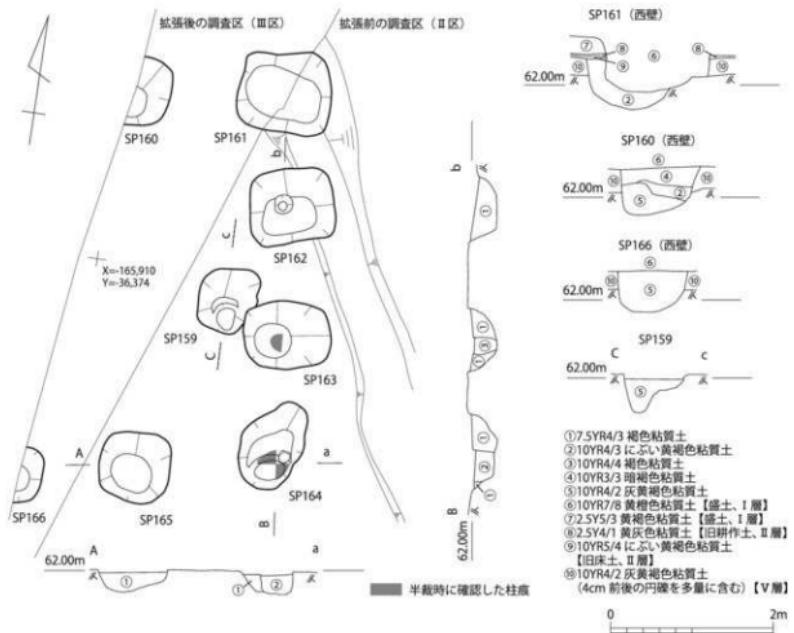


図12 建物2 平・断面図 (S = 1/60)

とができた。そのため、建物2を構成するピットの深さは、遺構検出面から計測すると25～40cmであるが、除去したV層の厚み分を加えて復元すれば、50～60cmとなる。

なお、SP163と重複した位置には、SP159が存在する。掘方の平面形は隅丸方形で、一辺約80cm、検出面からの深さは約50cmである。柱痕跡は残っていなかったが、底面は南寄りに大きく窪んでおり、ここに柱が建っていたと考えられる。切り合ひ関係から建物2に先行する遺構であることは明らかだが、これに対応するピットを見出すことができなかつた。

建物3 SP182～191で構成され、桁行3間、梁行2間である(図13、図版8上段)。柱掘方の配置は、今回検出したなかで最も整然としており、柱間は桁行で約1.4m、梁行で約1.8mである。掘方の平面形は隅丸方形で、一辺は50～70cmである。なお、SP188のみ平面図上では大きくなっているが、これは別のピットを含めて一つの遺構として掘削してしまったためであり、実際の形状よりも西側に広がっている。SP186とSP189の掘方埋土に柱痕跡が認められ、前者は径約18cm、後者は長軸約28cmで、いずれも掘方の中心に位置する。深さは検出面より10～15cmである。

なお、この建物と関係する可能性のある遺構として、SP250を挙げておきたい。建物のほぼ中軸線上に位置しており、径約90cm、検出面からの深さ約35cmで、柱掘方を上回る規模であることから、建物内の土坑として機能していた可能性もあるだろう。

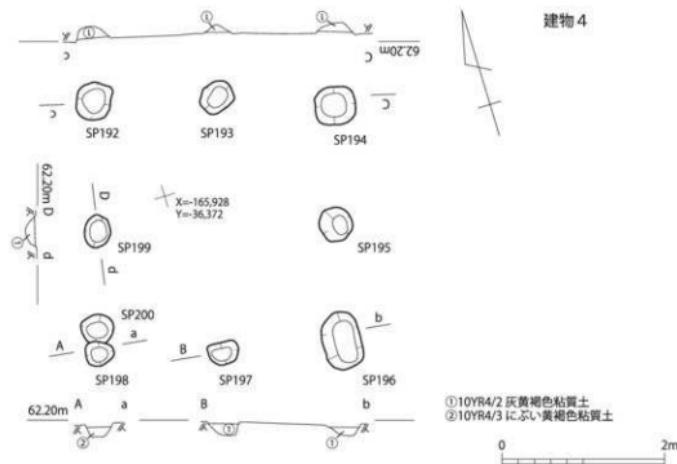
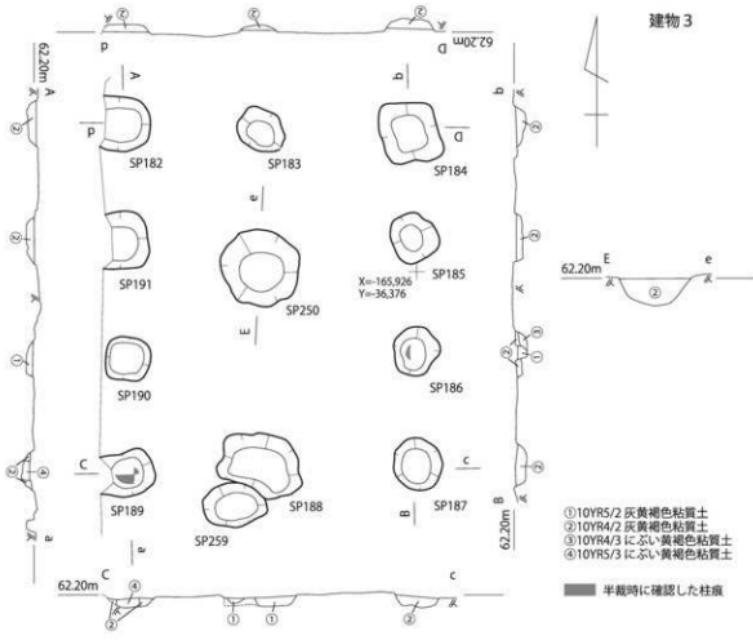


図 13 建物 3 および建物 4 平・断面図 (S = 1/60)

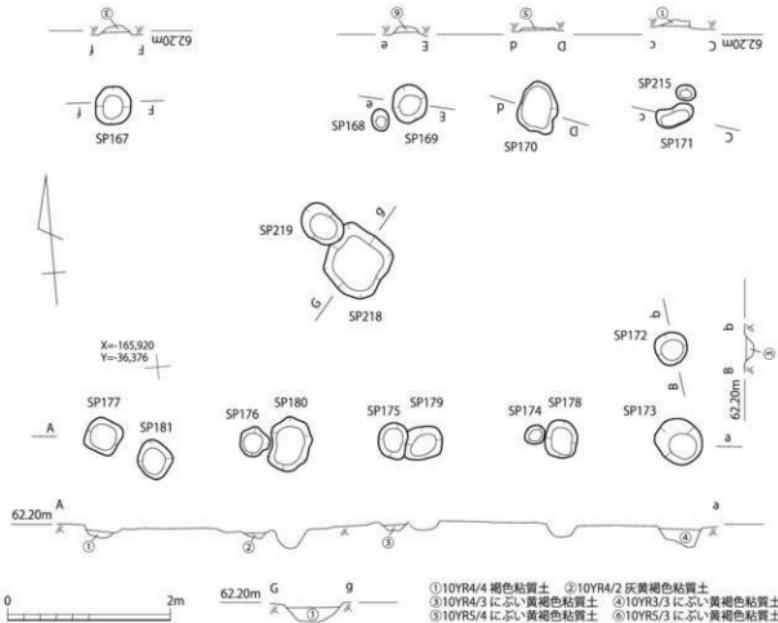


図 14 建物 5 平・断面図 (S = 1/60)

建物 4 S P 192 ~ 199 で構成され、桁行 2 間、梁行 2 間である（図 13、図版 8 下段）。掘方埋土に柱痕跡が認められないため、柱間は推定であるが南北方向で約 1.6 m、東西方向で約 1.5 m となる。S P 196 が柱の抜き取りのためか北側に膨らんでいるが、それを除けば径 35 ~ 50cm で、深さは検出面より 10 ~ 20 cm である。

建物 5 S P 167、169 ~ 171、173 ~ 177 などで構成されるが、検出状態が良好でない（図 14）。梁行の柱の掘方は 1 基（S P 167 と S P 169 の間）が抜け落ちているものの、ほかはおおむね等間隔に並んでいる。いずれの掘方にも柱痕跡が認められないため、柱間は推定であるが 1.7 ~ 1.8 m となる。西側はさらに調査区外へ延びる可能性があり、桁行 4 間以上ということしかわからない。梁行については S P 172 が復元ライン上に位置しており、仮にこれが梁行を構成する掘方であれば、柱間は 1.1 m 前後で梁行も 4 間になる可能性も出てくるが、他の建物に比べると柱間が狭すぎるようと思われ、結論は保留しておきたい。掘方の平面形は円形で、径 30 ~ 55 cm である。検出面からの深さは、建物のコーナーになる S P 173 のみが約 25 cm であるが、それ以外は 5 ~ 15 cm である。

なお、若干軸がずれながらも南側の桁行とほぼ重なるようにして、等間隔に並ぶ S P 178 ~ 181 がある。S P 175 と S P 179 の切り合い関係から、建物 5 に先行するものであったことがわかるが、対

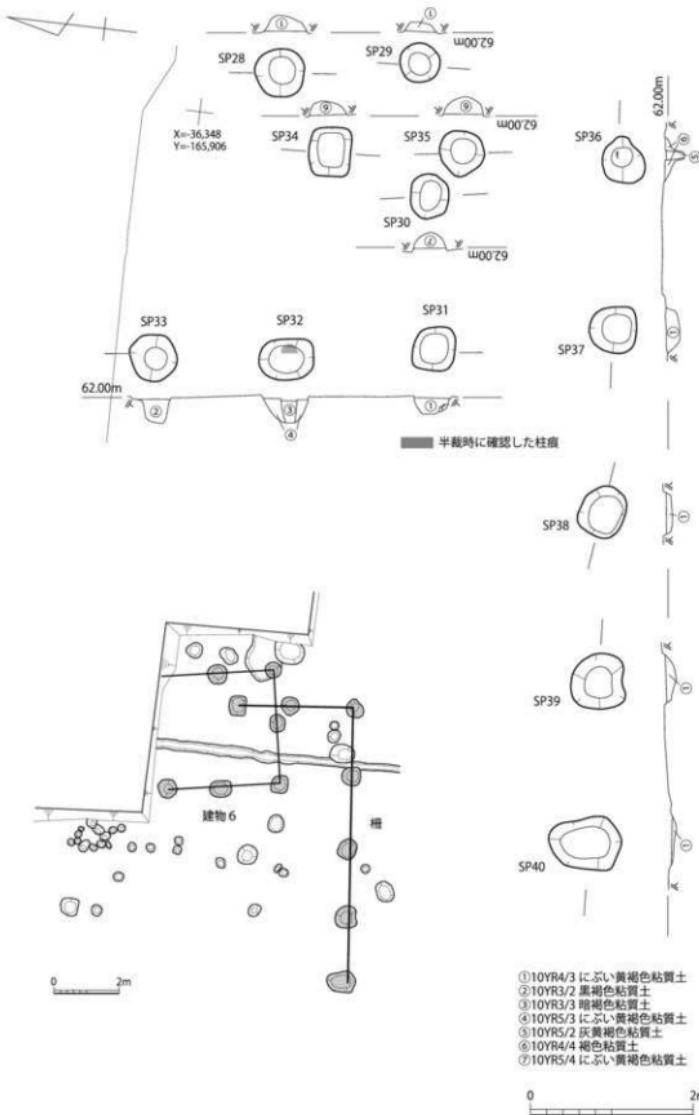


図15 建物6および柵 平・断面図 (S = 1/60)

向する桁行のピットを見出すことはできなかった。柱間は約 1.7 m で建物 5 とほぼ同じであり、径や深さも大差はない。建物 5 の前身となる建物が存在した可能性を指摘しておきたい。

建物 6 ここまでみてきた建物とは異なり、調査終了後の図上での検討により判明した。S P 28 ~ 33 と調査区外のピットで構成される（図 15）。S P 30 に対向する位置でピットを検出できなかつたことから、さらに北側へ延びるものと判断し、桁行 3 間以上、梁行 2 間と復元した。掘方の平面形は円形で、径は 45 ~ 60 cm、検出面からの深さは約 15 ~ 30 cm である。S P 32 の掘方埋土のみに径約 20 cm の柱痕があり、掘方のほぼ中心に柱が建っていたことがわかる。なお、この S P 32 からは半裁時（掘方内か柱痕内かは不明）に鉄滓が、柱痕内から鉄釘が 2 点出土している。柱間は桁行、梁行ともほぼ同じで約 1.8 m 前後と考えられる。

その他 建物 1 の西側において、建物のピットである可能性を考えたものがある（図 4、5）。掘方が整然と並ばず、建物かどうかの確証がないため、概要を記すことにとどめておきたい。

まず、西側の梁行と重なる位置に SP15 ~ 20 があり、桁行 2 間以上、梁行 1 間となる可能性がある。柱間は心々で桁行が約 1.3 m ~ 1.5 m、梁行が 3.2 m である。さらにその西側に SP21 ~ 25 があり、同じく桁行 2 間以上、梁行 1 間となる可能性がある。柱間は心々で桁行が約 1.4 ~ 1.7 m、梁行が約 2.5 m である。

（2）出土遺物

土師器、須恵器、鉄製品が出土している（図 16、図版 13）。38 ~ 42 は建物 1、43・44 は建物 2、45 は建物 3、46 は建物 5、47 は建物 6 に属するピットから出土した。

土師器 38 は鍋の把手である。厚さ 1.1 cm ほどの扁平な耳状の把手である。鍋の体部にはハケ目調整が施されている。S P 1（建物 1）からの出土である。

45 の椀は口径 13.0 cm、残存器高 3.0 cm を測る。内外面とも剥離と摩滅のために調整が分からぬが、体部外面に指頭圧痕が観察できる。S P 186（建物 3）からの出土である。

須恵器 39 の壺身は大型品で、口径 20.0 cm、残存器高 4.3 cm を測る。40 の壺身と同じように高台が付いていたのか、平底であったのか、欠失しているため分からぬ。S P 9（建物 1）からの出土である。40 は高台をもつ壺身で、高台径 15.1 cm、高台高 0.4 cm、残存器高 1.5 cm を測る。高台はあまり高くない。底部は高台の内側にのみ、ヘラ削り調整が観察できる。S P 9（建物 1）の柱痕内からの出土である。41 の長頸壺は、頸基部径 7.6 cm、残存器高 6.2 cm を測る。大きく外傾する頸部をもつ。S P 8（建物 1）からの出土である。

43 の壺蓋は、平らに成形された天井部から直角に下方へ折れ曲がる口縁部をもつ。おそらく扁平な宝珠形のつまみがつけられていたと推測できるが、欠失している。口径 15.9 cm、残存器高 1.0 cm を測る。天井部の 2 / 3 範囲に回転ヘラ削り調整が施されている。天井部内面には回転ナデ調整の後に一定方向のナデ調整が付加されている。ロクロの回転方向は時計回りである。S P 164（建物 2）からの出土である。44 の壺身は、全体に浅く比較的扁平な器体に内傾する立ち上がりをもち、口径

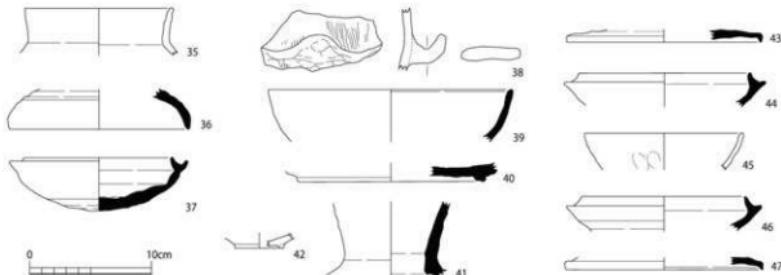


図 16 壁穴住居、掘立柱建物の出土遺物 ($S = 1/4$)

14.0cm、立ち上がり高 0.8cm、受部径 16.3cm、残存器高 2.8cm を測る。立ち上がりは貼り付けによって作り出している。S P 165 (建物 2) からの出土である。

46 の壺身は、全体に浅く比較的扁平な器體に内傾する立ち上がりをもち、口径 13.4cm、立ち上がり高 0.8cm、受部径 16.1cm、残存器高 2.8cm を測る。立ち上がりは貼り付けによって作り出している。体部の $3/4$ に回転ヘラ削り調整が施されている。ロクロの回転方向は反時計回りである。S P 172(建物 5) からの出土である。

47 の壺蓋は、平らに成形された天井部から、直角に下方へ折れ曲がる口縁部をもつ。おそらく扁平な宝珠形のつまみがつけられていたと推測できるが、欠失している。口径 16.1cm、残存器高 1.0cm を測る。S P 30 (建物 6) からの出土である。

黒色土器 42 の椀は内黒で、高台の断面は三角形に近く、外側に踏ん張る形態である。高台径 4.1cm、高台高 0.3cm、残存器高 1.3cm を測る。S P 1 (建物 1) からの出土で、掘方を段下げした際に出土した。

鉄製品 図示はしなかったが、建物 6 に属する S P 32 から鐵滓らしき塊と、鐵釘が出土している。鉄釘は 2 点あり、錆彫れのために原形が失われているが、一辺が約 0.6cm の方形の釘であったことが窺える。

第3節 柱列・柵・ピット

(1) 遺構の状況

柱列 建物 1 に属する S P 8 ~ 10 の内側に接するように、一列に並ぶ 4 基のピット (S P 11 ~ 14) が存在する (図 11、図版 6 上段)。掘方の平面形や大きさは建物 1 を構成するピットと同じで、S P 12 には底面に柱痕跡が残っていた。掘方の深さは、検出面から最も深い S P 13 で約 40cm であり、掘方の底面の標高はほぼ揃っている。これらに対応するピットは、調査区内には認められない。仮にこれらが建物の桁行を構成するピットで、対向するピットの列が南側の調査区外に存在するのであれば、梁行を構成するピットが調査区内で検出できてもよいはずである。しかし、想定位置を念入りに精査したもの、ピットを見出すことができなかった。建物 1 と比べると柱間が約 1.6 m と短く、軸も若干ずれている。

欄 S P 34 ~ 40 のピットはL字形に並び、柱痕跡が建物を構成するものに比べると細いことから、欄1として復元した(図15)。掘方は東西方向に5基、南北方向に3基並んでおり、南北方向の列は建物6と重なる。柱痕跡は径約10cmで、欄の屈曲部に位置するS P 36の掘方埋土で認められた。断面をみると、その柱痕跡の部分が掘方の底面よりも深くなっている、建物1の柱と同様に半打ち込み式によって建てられていた可能性も考えられる。遺構検出面からの深さは10~25cmで一定ではないが、これは検出面が傾斜しているためであり、底面の標高はほぼ揃っている。柱痕跡を確認したのが1基の掘方のみであるため、正確な柱間の間隔はわからないが、掘方のそれぞれの中心で計測すると1.7~2.3mと一定でない。このことからも、建物を構成するピットではない根拠になり得るのではないかだろうか。

このほかにも、直線上に並ぶものの、建物として復元できなかつたものがある(図4)。欄の北西ではS P 123~126の4基がほぼ等間隔に並び、さらにS P 126を起点にして、S P 134、136~138、140の順に南側へ一直線に並ぶ。このほか、これに一部重なるようにしてS P 127~129の3基が、その南側ではS P 130~133の4基が並ぶ。また、建物4の東側ではS P 201~203、205、206の5基が一直線に並ぶ。これらについても、別の欄を構成するピットである可能性を指摘しておきたい。

小ピット群 建物6の西側で、径約15~30cmの小規模のピットをまとめて検出した(S P 41~57、図17、図版9下段)。検出面からの深さはS P 51のみが約35cmと深く、それ以外は20~25cmである。これらには、南北方向に並ぶグループと、それに重なるように円形に並ぶグループに分られる。なお、S P 54については、2つのピットが重複したものであり、遺構検出時に切り合い関係等を認識できず、1基のピットとして遺構掘削してしまった。東半分は南北方向に並ぶグループ、1段下がる西半分は円形に並ぶグループに属する。

南北方向に並ぶグループは、S P 42~46、S P 54の東半分で構成される。掘方の間隔は、心々で50~85cmと一定でない。このほかに同じグループに含まれる可能性のある遺構として、S P 41とS P 104がある。S P 41はS P 42の東側に接するように位置しており、規模や深さは大差がないが、底面には石が据えられており、礎石としての機能があったと考えられる。今回の調査区において礎石

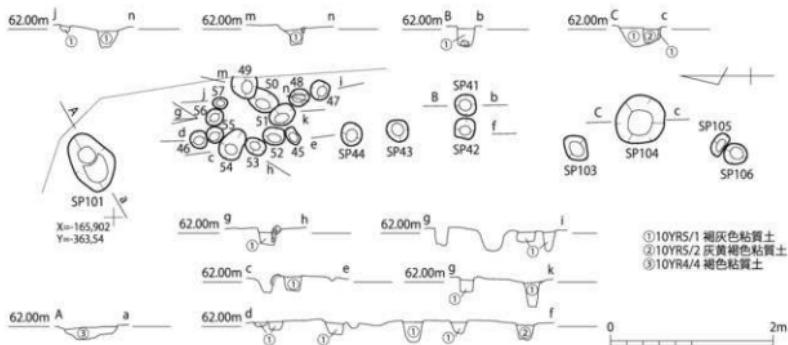


図17 小ピット群 平・断面図 (S = 1/60)

をもつビットは、この1基だけである。S P 104は南北方向のライン上に位置しており、S P 42からは南へ心々で2.2mである。掘方の径は約52cm、検出面からの深さは約25cmで、掘方の南寄りに径約19cmの柱痕跡が認められた。掘方の径は大きいが、深さや想定される柱の太さは小ビット群と大差はない。

次に円形に並ぶグループは、S P 49～53、S P 54の西半分、S P 55～57で構成される。これらのうちS P 50は掘方の南西寄りが、その後に掘削されたS P 49は掘方の南寄りがそれぞれ深くなっている。柱の位置を示唆している。これらのビットを結ぶと、径約70cmの円形ラインができるが、その性格等は不明である。

(2) 出土遺物

前項で触れた柱列から出土した遺物(48～56)に加え、その他のビットから出土した遺物(57～68)についてもここで述べる。土師器、須恵器、埴輪のほか、國化は行わなかったがサスカイト剥片が出土している(図18、図版12～14)。

土師器 48・49は高坏地、とともにS P 11(柱列)からの出土である。48は坏部の口縁部片と脚柱部片で、直接には接合しないものの、胎土の類似性から同一固体と判断した。口径は17.1cm、坏部の残存器高は1.5cm、脚柱中央部径は5.0cm、脚柱部残存器高は6.4cmを測る。浅いもののゆるやかな丸みをもつ坏部と外反して水平に延びる口縁部をもつ。口縁端部外面には一条の沈線がめぐる。坏口縁部内面には左方向に傾く正放射状の暗文が施されている。底面は欠失しているため暗文の状況は不明である。脚柱部は12面に面取りされている。内面は指押さえの痕跡が明瞭に残る。49は、坏部に脚柱基部が残存する。口径26.6cm、坏部高2.4cm、脚基部径5.0cm、残存器高3.9cmを測る。浅いもののゆるやかな丸みをもつ坏部と、ゆるやかに外反して延びる口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。坏部内面には右方向に傾く正放射状の暗文が一段施されている。底部外面はヘラ削り調整が施されている。脚柱部は12面に面取りされている。50の皿は、ゆるやかに外反する口縁部をもつ部に、断面四角形の低い高台が貼り付けられた底部をもつ。口径29.8cm、高台径25.7cm、高台高0.4cm、残存器高2.8cmを測る。内外面とも横ナデ調整が観察できるだけで、暗文はない。S P 12(柱列)からの出土である。

60の坏は高台部だけが残存していて、高台径7.0cm、高台高0.7cm、残存器高1.5cmを測る。S P 110からの出土である。

61の皿は、わずかにふくらみをもつ底部に、大きく外反する口縁部をもつ。口径19.2cm、底径16.7cm、器高2.1cmを測る。口縁部は内外面横ナデ調整、底部は内外面ともナデ調整で、外面には指頭圧痕が残る。S P 111からの出土である。

62の皿は、平坦な底部に外傾する口縁部をもつ。口径19.1cm、器高2.2cmを測る。口縁部内面に煤が付着している。S P 134からの出土である。

63の坏は、やや丸みをもつ底部に、ゆるやかに外傾する口縁部をもつ。口径14.2cm、器高3.5cmを測る。S P 137からの出土である。

64の高坏は、坏部底部から脚基部にかけての破片である。中実の脚部をもつ高坏で、脚基部径2.8cm、残存器高2.1cmを測る。S P 157からの出土である。

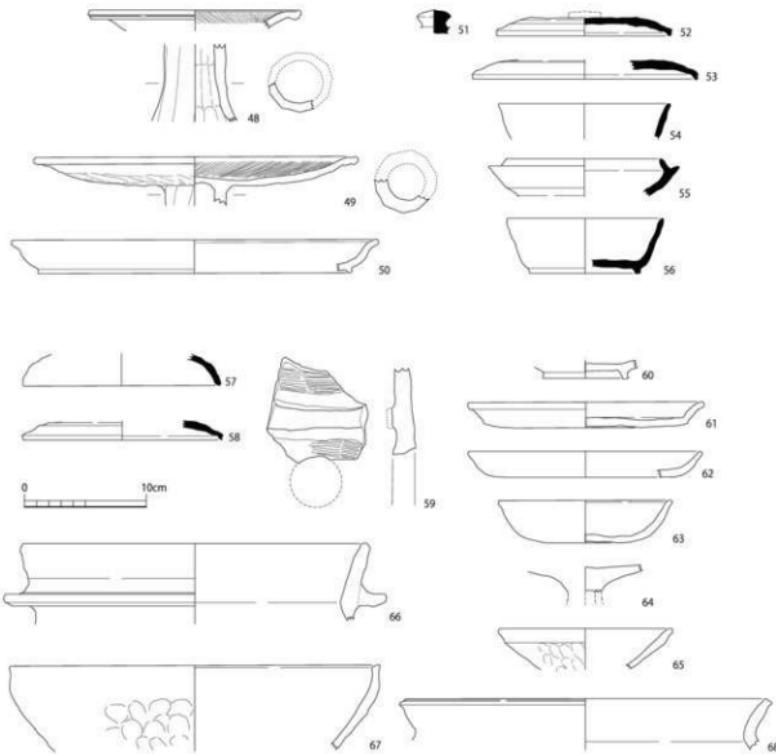


図18 柱列、ピットの出土遺物 (S = 1/4)

65は全体に浅い椀で、底部からそのまま大きく外傾して開く口縁部をもつ。口縁部外面については、横ナデ調整によりわずかに凹面状を呈す。口径 14.2cm、残存器高 3.3cm を測る。S P 278からの出土である。

66は生駒西麓産の胎土をもつ長胴の羽釜である。口径 28.1cm、鍔部径 31.3cm、鍔幅 2.3cm、残存器高 6.4cm を測る。鍔部下面から体部外面に煤が付着している。遺物番号 62 の皿と同じく、S P 134からの出土である。

67の鉢は、なだらかに上方へ延びるカーブを描いた後、ほぼ直立するように立ち上がる口縁部をもつ。口径 30.3cm、残存器高 7.1cm を測る。内外面ともナデ調整が施されているが、体部外面には指頭圧痕が観察できる。建物 3内の土坑として機能した可能性を指摘した S P 250からの出土である。

68の甕は、外反する口縁部の端部は肥厚せず、ほぼ平坦面をなすが、端面に一条の沈線がめぐる。口径 29.2cm、残存器高 4.1cm を測る。S P 257からの出土である。

須恵器 51 は坏蓋の宝珠形つまみ部片で、つまみ部高 1.4cm、つまみ部基部径 1.9cm、残存器高 1.9cm を測る。S P 11（柱列）からの出土である。52 の坏蓋は、わずかにふくらみをもつ天井部から屈曲して垂下する口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。天井部には扁平気味の宝珠形つまみが付いていたと推測されるが、貼り付けの痕跡のみが観察できる。口径 14.3cm、残存器高 1.4cm、つまみ基部径 2.6cm を測る。天井部外面の 3/4 は回転ヘラ削り調整である。ロクロの回転方向は反時計回りである。S X 11 からの出土であるが、出土位置の記録から S P 14（柱列）に属することがわかっている。53 の坏蓋は、平らに成形された天井部から、直角にわずかに下方へ折れ曲がる口縁部をもつ。おそらく 51 のような宝珠形のつまみがつけられていたと推測できるが、欠失している。口径 17.9cm、残存器高 1.4cm を測る。天井部外面の約 3/4 に回転ヘラ削り調整が、内面に回転ナデ調整の後、不定方向のナデ調整が施されている。ロクロの回転方向は時計回りである。S P 11（柱列）からの出土である。54 の坏身は、直線的に外傾する体部をもつ。高台が付されていたのか、平底であったのかは分からぬ。口径 14.0cm、残存器高 2.9cm を測る。同じく S P 11（柱列）からの出土である。55 の坏身は、全体に比較的扁平な器体に内傾する立ち上がりをもち、口径 12.7m、立ち上がり高 0.8cm、受部径 15.5cm、残存器高 3.0cm を測る。立ち上がりは貼り付けによって作り出している。体部の 3/4 に回転ヘラ削り調整が施されている。S P 13（柱列）からの出土である。56 の坏身は、直線的に外傾する体部に高台が貼り付けられている。口径 12.7cm、器高 4.5cm、高台径 9.1cm、高台高 0.5cm を測る。底部は高台貼り付けの前にヘラ切りされた今まで、調整はされていない。S P 14（柱列）からの出土である。

57 の坏蓋は、口縁部と体部の境目が分からぬ扁平なドーム状の蓋である。口径 16.0cm、残存器高 2.7cm を測る。残存部には回転ナデ調整が観察できるだけである。S P 27 からの出土である。

58 の坏蓋は、わずかにふくらみをもつ天井部に、ほぼ直角に垂下する口縁部をもつ。口径 16.2cm、残存器高 1.6cm を測る。天井部 3/4 に回転ヘラ削りが施されている。ロクロの回転方向は反時計回りである。SP101 からの出土である。

埴輪 59 は器体のカーブが必ずしも円筒形にならないので、埴輪とするのに躊躇したが、タガラしき突帯と円形の透かしの存在、そして外面にみられる横方向のハケ目の存在から埴輪と判断した。この判断が正しければ、形象埴輪である可能性が考えられる。SP104 からの出土である。なお、埴輪の出土は、今回の調査ではこの例だけである。

第4節 土坑

(1) 遺構の状況

土坑（S K 1）は、5 枚の銭貨「神功開寶」を入れた土師器の埋納遺構で、溝（S D 1）の西側で確認した（図 19、原色図版 2～3、図版 10）。掘方の平面は楕円形を呈し、長軸約 51cm、短軸約 36 cm である。遺構検出時は、ほかのピットとの違いを見出すことができなかつたが、掘方を段下げした段階で土師器の口縁部が現れた。その中心を通るように掘方を半裁したところ、ほぼ完形の土師器甕（遺物番号 70）が据えられた状態で埋められていることがわかつた。

土坑の直上にはⅣ層があり、出土遺物や土質・土色の類似から、溝（S D 1）の埋没とほぼ同時期に堆積したものと考えている。よって、土坑の上面が大きく削平を受けているとは考えにくく、調査

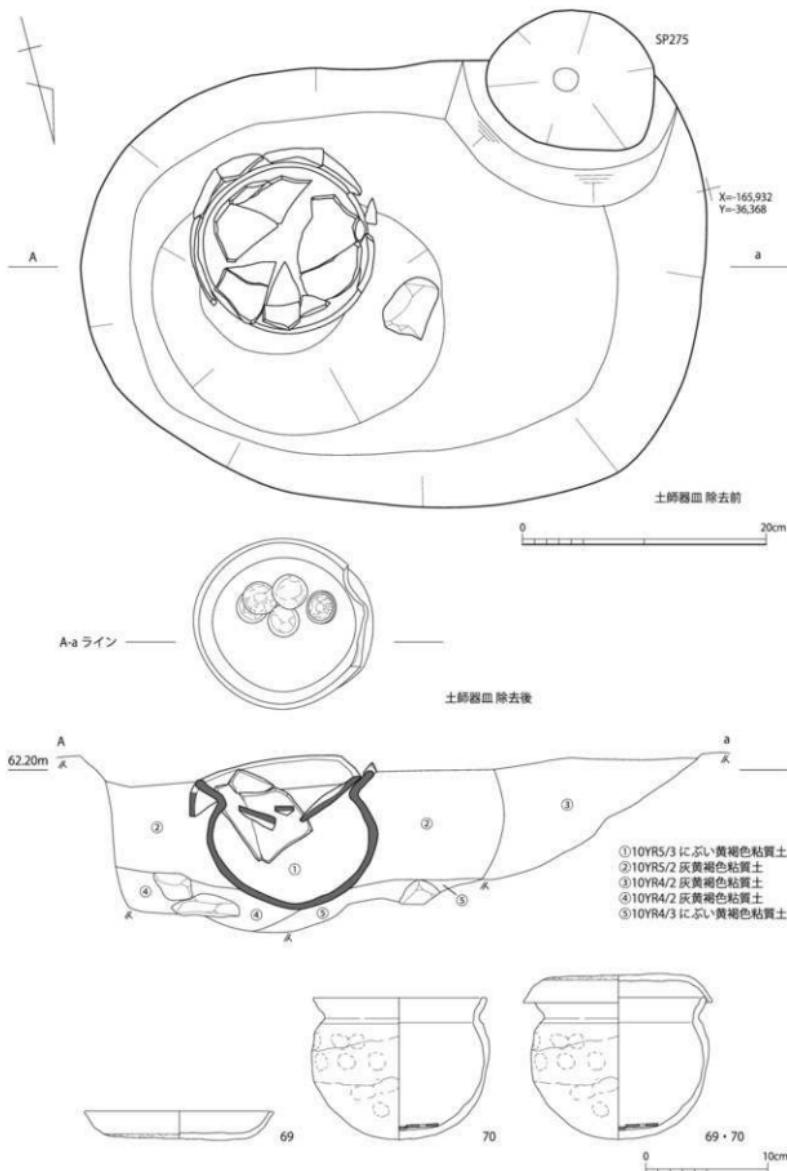


図 19 土坑 平・断面図および出土遺物 (S = 1/4)

によって本来の掘り込み面であるV層を削ってしまったことを差し引いても、当時の地表面から浅い位置に土師器が埋められていた蓋然性が高いと考えている。

土師器は掘方の中心でなく、東寄りに据えられている。掘方の土層断面をみると、灰黄褐色粘質土（土層番号③）が埋まつた後に据え付けのための穴を掘り、にぶい黄褐色粘質土（土層番号⑤）と灰黄褐色粘質土（土層番号④）を敷いて中央に土師器を据え付け、灰黄褐色粘質土（土層番号②）で一気に埋め戻したような堆積状況となっている。この状況から土坑（SK1）は一つの造構ではなく、重複するように先行する別の造構が存在し、据え付けの掘削前に存在した灰黄褐色粘質土（土層番号③）は、別の造構の埋土であった可能性も考えられる。

掘方の半蔵後、壺の内部に堆積した土を少しづつ除去していくと、別個体の土師器片が内部に落ち込んでいることがわかった。一部では壺の口縁部を取り巻くようにして別個体の口縁部片が残っていたことから、逆さまにした土師器皿（遺物番号69）で蓋をしていたものと判断した。検出時には土圧によって壺の口縁部の一部と皿の蓋がすでに割れており、壺の内部には土や植物の根が流入していたが、埋納時には壺の内部は空洞の状態であったことは容易に理解できた。当然ながら、壺の内部には何らかのものが納められていた蓋然性は高く、内部の土は触らずに壺を取り上げて科学的な分析にかけるべきであった。しかし、軽率にもその場で内部の土を取り除いてしまい、5枚の銭貨の発見に至った。なお、この内部の堆積土から種子2点を採取したが、それ以外の遺物は確認できなかった。

出土時の銭貨は、西側にやや離れて置かれている1枚のみが明黄褐色をしており、他の4枚は重なり合って緑青に覆われていた。明黄褐色の銭貨は辛うじて「□□開□」と判読でき、土師器壺の形状も考慮して、「和同開珎」もしくは「神功開寶」と推測できたが、残りの4枚については、見えている面が表裏の判断もできない状態であった。これらの銭貨は壺の底に貼り付いた状態であり、出土状況の記録作業後、銭貨を動かさないよう慎重に土師器壺を取り上げた。

発掘調査終了後、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所の協力を得てX線撮影を行ったところ、すべて「神功開寶」であり、かつ銭文を上に向いていることが判明した（図版15）。また、あわせて壺の底部付近をX線CT撮影し、5枚の銭貨の下にほかの遺物が存在しないことも確認している。銭貨は壺から取り外さず、出土時の状態のまま保存することになったので、銭貨の詳細な計測は行っていない。

（2）出土遺物

上述のとおり、銭貨5枚を入れた土師器壺（70）と、その蓋として使用されていた土師器皿（69）が出土した（図19、原色図版1、図版12）。このほかに、土坑の埋土中から胎土を異にする土師器片が1点と、須恵器の極小破片が1点出土している。

69の皿は、ほぼ平坦な底部から外傾して延びる口縁部をもつ。口縁端部はわずかに外方へつまみ出し、端部は丸くおさまる。口径15.4cm、器高2.3cmを測る。口縁部内外面は横ナデ調整、底部内面はナデ調整、外面はナデ調整を施しているが、指頭圧痕が明瞭に観察できる。

70の銭貨を入れた壺は、球形の体部から、わずかに屈曲して聞く口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。口径14.0cm、体部最大径14.5cm、器高11.6cmを測る。口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部は内外面ともナデ調整が施されているが、体部外面には成形時の粘土紐の継ぎ目と指頭圧痕が明瞭に観察できる。5枚の銭貨は略測ではあるが、すべて直径2.6cm、厚さ0.25cm、内孔の一辺は

0.5cmを測る。X線写真（図版15）を見る限りでは、字体の特徴は5枚とも共通する。

また、壺内部の堆積土から採取した種子2点と、錢貨のクリーニング時に採取した土（錢貨の表面および錢貨周辺の壺底部に付着していたもの）の鑑定を、奈良教育大学の金原正明氏に依頼した。その結果、種子はそれぞれヤブツバキとムギであることがわかった。詳細については、付章の報告のとおりである。

第5節 溝

（1）遺構の状況

S D 1 調査区の南端で確認した（図6、7、図版4上段）。調査区外に延びており、検出規模は長さ約5m、幅約2.5mである。調査区南壁の土層断面状況から、V層上面から掘り込まれていることがわかっている。底面はほぼフラットな状態であり、掘り込み面からの深さは約30cmである。埋土は褐色粘質土の單一層で、埋没後には両肩部を超えて灰黃褐色粘質土層（IV層）が堆積している。遺物を多量に包含する両者は土質、土色が類似しているほか、ともに製塙土器が含まれているなど出土遺物の傾向も似ており、S D 1 の埋没とIV層の堆積は同時期か近いものと考えられる。

S D 2 調査区のはば中央に位置しており（図5・6）、遺構検出時は土坑と認識していた。検出規模は長さ約4.4m、幅約1.7mで、検出面（地山面）からの深さは約20cmである。埋土は暗褐色粘質土の單一層で、15cm以下の礫が多く含まれていた。なお、このS D 2 の東側では、明褐色砂礫の地山面が島状に高くなっていることが注意される。

S D 3 S D 2 のすぐ北で確認した（図5・6）。検出規模は長さ約3.6m、幅約1.5mで、検出面からの深さは約30cmである。平面は不定形で、東辺のみが直線状に延びる。埋土は褐色粘質土の單一層で、底面の3箇所には径30～40cmのピット状の痕跡が残っている。

S D 4 建物6を縦断するように認められる（図5）。検出規模は長さ約8.6m、幅約30cmで、検出面からの深さは約5cmである。埋土は旧耕作土（III層）と類似しており、S P 37やS P 90の埋没後に掘り込まれていることから、III層に伴う排水溝ではないかと考えられる。

ここまで、溝を遺構番号ごとに概観してきた。大幅に時代が下る可能性が高いS D 4 を除いて、あらためて位置関係をみると、S D 1～3が同じ直線上に位置していることが分かる（図4）。溝の掘り込み面は遺構検出面よりも上であり、溝の深かった箇所だけを今回検出できたと考えれば、本来は1条の溝であったことが想定できる。

それを補強する材料は、調査区北壁にも認められる（図7上段、図版4下段）。遺構面を削りすぎたため平面では検出できなかったが、地山面を掘り込んだ跡がみられ（土層番号⑫、⑬）、遺構の存在を示唆している。掘り込みが二つに分かれているように見えるのは、S D 2やS D 3がそうであったように、遺構の底面がフラットでなかったからであろう。この壁面に残る溝の西側の肩は、S D 1の西辺のはば延長上にあたり、これらがひと続きであった蓋然性は高い。

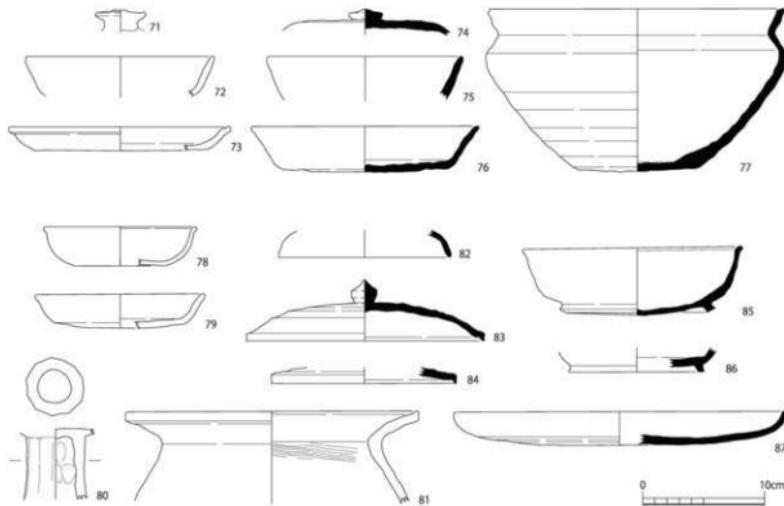


図20 溝の出土遺物 ($S = 1/4$)

(2) 出土遺物

S D 1 および 2 からは、土師器、須恵器が出土しており、71～77はS D 1、78～87はS D 2からの出土である(図20、図版12～14)。また、図化はしなかったがS D 1 からは製塙土器が、S D 2 からは弥生土器とサスカイト製の搔器が出土している。なお、S D 2での出土状況について少しうまく述べておくと、遺構の中央南寄りでは土師器壺(遺物番号79)、土師器甕(81)、須恵器蓋壺(83・84・86)がまとまって出土し(図版11上段)、遺構のほぼ中央では土師器壺(78)、須恵器皿(87)がまとまって出土している(図版11下段)。

土師器 71は蓋の宝珠形のつまみ部だけが残ったものである。つまみ部径4.1cm、つまみ高1.6cmを測る。72の壺は、体部から直線的に外傾する口縁部をもつ。口径15.2cm、残存3.3cmを測る。73の皿は、外傾して大きく聞く体部に、つまみ上げて丸く肥厚する口縁端部をもつ。口径18.0cm、器高2cmを測る。

78・79は壺である。78はほぼ平坦な底部から丸みをもって立ち上がる体部をもつ。口縁部はわずかに外反して開き、口縁端部はわずかに外方へつまみ出して丸くおさまる。口径12.4cm、器高3.2cmを測る。79は、ほぼ平坦な底部から外傾して聞く口縁部をもつ。口縁端部は丸くおさまる。口径13.8cm、器高2.8cmを測る。80は高壺の脚柱部片である。外面は12面に面取りされた中空の脚柱部で、脚柱部径4.7cm、残存器高5.8cmを測る。残存脚柱部の下端が開き気味になっていることから、それほど高い脚柱部にならないことが想定される。81の甕は、体部から「く」の字状に大きく聞く口縁部をもつ。口縁端部は上方にわずかにつまみあげる。口径23.9cm、残存器高7.5cmを測る。体部内面にはハケ目調整が施されている。

須恵器 74 の坏蓋は、わずかにふくらみをもつ天井部に宝珠形のつまみが貼り付けられた坏蓋である。つまみ部径 2.8cm、つまみ高 0.8cm、残存器高 2.2cm を測る。天井部外面の約 3／4 は回転ヘラ削り調整、内面には回転ナデ調整の後、不定方向のナデ調整が付加されている。ロクロの回転方向は時計回りである。75・76 は坏身である。75 は、体部から直線的に外傾する口縁部をもつ。高台が付されていたのか、平底であったのかはわからない。口径 15.9cm、残存 3.7cm を測る。76 は、体部から直線的に大きく開く口縁部をもつ平底の坏身である。口径 18.5cm、器高 3.7cm を測る。底部外面は回転使用のヘラ切り未調整である。内面は回転ナデ調整の後、2 方向にナデ調整を付加する。77 の鉢は、平底から外傾して開く体部に、比較的丸みをもって張り出す肩部と、屈曲して開く口縁部をもつ。口縁上端は、内傾する平坦面をもつ。口径 24.1cm、肩部径 24.5cm、器高 13.2cm を測る。体部外面の 3／4 は回転ヘラ削り調整である。

82～84 は坏蓋である。82 は天井部と口縁部の境目のないドーム状の形態をもち、口径 14.0cm、残存器高 2.2cm を測る。83 はふくらみをもつ天井部に、屈曲して垂下する口縁部をもつ。口縁端部は尖り気味におさまる。天井部に擬宝珠形のつまみが貼り付けられている。口径 19.5cm、つまみ部最大径 2.1cm、つまみ基部径 1.6cm、つまみ高 1.8cm、器高 5.0cm を測る。天井部外面の約 3／4 は回転ヘラ削り調整、ただしその後回転ナデ調整を付加している。内面には回転ナデ調整の後、不定方向のナデ調整が付加されている。ロクロの回転方向は時計回りである。84 は口径 15.1cm、残存器高 1.3cm を測る。口縁端部は尖り気味におさまる。85・86 は坏身である。85 は椀状に丸みをもつ体部に、外方へ開く高台がつく。口縁短部は外側につまみ出すように丸く肥厚する。口径 18.0cm、器高 5.5cm、高台径 12.7cm、高台高 0.5cm を測る。内外面とも回転ナデ調整が施されている。86 は底部だけが残存しており、高台径 11.1cm、高台高 0.5cm、残存器高 1.8cm を測る。87 の皿は、わずかに丸みをもつ底部に内湾するように立ち上がる口縁部をもつ。口縁端部は尖り気味におさまる。口径 27.0cm、器高 2.7cm を測る。底部外面は回転ヘラ削り調整の後、回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整の後、一定方向のナデ調整を施す。ロクロの回転方向は時計回りである。



写真3 建物1の復元（東から）

第6章 遺構の変遷

ここまで、今回の調査で得られた成果について、調査経過も情報として残すことに留意しつつ、説明を加えてきた。最後に、復元した遺構の変遷について述べ、まとめに代えることにしたい。

今回の調査では、おもに2時期の遺構を確認した。1棟のみの確認となった竪穴住居については、遺構面を削りすぎてしまったこともあり、カマドや櫛溝とみられる遺構の一部を確認したにとどめた。所属時期については、床面から出土した須恵器壺身（図16の遺物番号37）や、隣接するピットから出土した壺蓋（図16の遺物番号36）から判断して6世紀末ごろ、田辺編年【田辺1981】でいえばTK209型式に該当すると考えられる。同時期か前後する時期の須恵器はほかの場所からも出土しているが、この時期に確実に位置づけることのできる遺構は、竪穴住居のみである。ただし、奈良時代に属する遺物が出土していない建物5が、竪穴住居の方向と建物軸をそろえているようにみえることから、前後する時期に建てられた可能性はあるだろう。

掘立柱建物については、前述した建物5を含む6棟分を復元することができた。これらのうち、柱掘方の大きさから中心的な位置を占めると思われるが、建物1と2である。両者は建物軸がそろっており、併存した蓋然性が高い。調査区を二分するように南北に走る溝（SD1～3）や、柵の方向も同一方向であり、計画的に配置されていたものと考えている。

これらを含めた建物の所属時期は、ほとんどが奈良時代に属するものと考えているが、柱穴内からの出土遺物が少なく、竪穴住居段階の時期の遺物の混入もあり、時期を絞り込むのは困難である。建物1からは1点だけ時期の下る黒色土器（図16の遺物番号42）が出土しているが、1点でかつ細片であり、これだけをもって建物の年代を下げるには躊躇せざるを得ない。

これに対して、溝（SD1、2）からは岡化可能な遺物が一定量出土した。また、溝（SD1）の埋没とほぼ同時期に堆積したとみられるIV層からも、一定量の遺物が出土している。溝（SD1～3）が集落を区画する機能を有していたとみなすことが間違いでなければ、溝（SD1、2）やIV層内に属する遺物から建物の所属時期をある程度推測することができるであろう。

溝のなかでも、特にSD2からまとまって出土した須恵器（図20）の多くについては、奈良時代前半期に位置づけられるものと考えている。それに対して、IV層内の土師器の大半や製塙土器（図9）、また確実にIV層内の遺物と判断できた須恵器壺（図9の遺物番号34）については、奈良時代後半期に位置づけられるものと考えている。よって、調査区内で確認できた建物の変遷としては、古墳時代の終わりから飛鳥時代にかけて竪穴住居が単発的に存在し、空白期間をおいて奈良時代前半に溝（SD1～3）が掘削され、IV層が堆積する奈良時代の終わりごろまで掘立柱建物が一定のまとまりをもって展開したということになろう。

さて、5枚の神功開寶を入れた土師器壺は、思いもよらない発見であったが、内部に残されていた情報をすべて引き出すことができなかったのは、調査担当者の不注意が原因である。奈良時代の錢貨を土器に入れて土坑に埋納した事例としては、藏骨器としての性格をもつものを除けば、府内では枚方市百濟寺遺跡【谷川1992、財團法人 枚方市文化財研究調査会1995】に統いて2例目と思われ、貴重な成果であっただけに悔やまれる。

銭貨を入れた土器については、平城京跡では多数の出土事例があり、その性格は地鎮に伴うもの、もしくは胞衣壺とするものに分かれるようである。畠ヶ田遺跡に暮らしていた人びとが、どちらの意図をもって埋納したのかを判断するのは難しいが、調査担当者としての結論を先に述べると、胞衣壺ではないかと考えている。その理由として挙げられるのは、土師器壺が埋納された時期である。神功開寶の初鉄は765年であるが、土師器壺の形状は8世紀末から9世紀初頭にかけての特徴をもつと考えており、今回の調査区内での集落の廃絶期に埋納されたことになる。土坑に近接する建物は認められず、仮に地鎮であれば集落全体を対象としたものになるだろうが、集落の廃絶期に近い時期に改めて地鎮を行った理由を考える必要が生じるのである。

また、府内での銭貨の出土事例【松村・柴原2008】をみると、すでに述べたように土器に入れて埋納した事例はごく限られており、河川などからそのままの状態で出土することがほとんどのである。これらは地鎮を意図したものと考えられるが、地方においては銭貨をそのまま埋納する場合と、土器に入れて埋納すなわち胞衣壺として利用する場合といったように、明確な使い分けがあった可能性もあるのではないだろうか。

筆者の力量不足もあり、今回の調査によって遺跡から十分な情報を引き出せなかつたことは否めないが、今後周辺で予定されている市営住宅の建て替え工事により、畠ヶ田遺跡とその周辺の状況が徐々に明らかになると思われる。畠ヶ田遺跡がいわゆる官衙的集落に位置づけられるものかどうかなど、検討すべき課題は多い。これまでにってきた周辺の調査成果の整理作業も含めて、一歩ずつ着実に取り組んでいきたいと考えている。

参考・引用文献

- 大阪府教育委員会 1961『河内新堂・鳥舍寺跡の調査』(『大阪府文化財調査報告』第12輯)
- 摂河泉古代寺院研究会 2001『第4回摂河泉古代寺院フォーラム 中世寺院の幕開け—11・12世紀の寺院の考古学的研究—』
- 田辯昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 谷川博史 1992『百濟寺遺跡(第12次調査)出土の薬莢形土器について』『財團法人 枚方市文化財研究調査会研究紀要』第2集
- 富田林市遺跡調査会 2004『畠ヶ田南遺跡』I (『富田林市遺跡調査会報告』24)
- 富田林市教育委員会 1982『中野遺跡発掘調査概要』III (『富田林市埋蔵文化財調査報告』7)
- 富田林市教育委員会 1993『最近の調査から』(市立寺内町センター展示パンフレット)
- 富田林市教育委員会 1995『平成6年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(『富田林市埋蔵文化財調査報告』26)
- 富田林市教育委員会 2000『平成11年度富田林市内遺跡群発掘調査報告書』(『富田林市埋蔵文化財調査報告』31)
- 富田林市教育委員会 2003『新堂廐寺跡・オガンジ池瓦窯跡・お龜石古墳』(『富田林市埋蔵文化財調査報告』35)
- 富田林市教育委員会 2009『畠ヶ田南遺跡』II (『富田林市文化財調査報告』42)
- 富田林市史編集委員会 1985『富田林市史』第一巻(本文編I)
- 財團法人 枚方市文化財研究調査会 1995『百濟寺遺跡(第12次調査)』『枚方市文化財年報14(1992年度分)』
- 松村恵司・柴原永遠男 2008『平成19年度研究集会報告書 和同開称をめぐる諸問題(二)』

付章 錢貨が埋納された甕の有機質遺体の同定分析

奈良教育大学 金原 正明

1. はじめに

畠ヶ田遺跡は弥生時代から中世にかけての集落遺跡であるが、今回の発掘調査では、奈良時代の錢貨が埋納された甕が検出された。ここでは甕から検出された炭化物の同定と微細な有機物の同定分析を行う。

2. 試料と方法

試料は順に番号をふり、試料1：炭化物1、試料2：炭化物2、試料3：堆積物II F212（錢貨付近）の3点である。

試料1、2は炭化物であることから、肉眼および実体顕微鏡で観察し同定を行った。試料3の堆積物は花粉分析の方法で、1) 水酸化カリウム処理 - 2) フッ化水素酸処理、3) アセトリシス処理を行い、プレパラートを作成し生物顕微鏡で観察した（原色図版4）。

3. 結果

(1) 試料1：炭化物

観察の結果、ヤブツバキの種皮の欠落した炭化種子であった。

・ヤブツバキ *Camellia japonica* L. 種子 ツバキ科

炭化し黒色で三角状楕円形を呈し、一端に点状のへそがある。

(2) 試料2：炭化物

・ムギ類（オオムギ・コムギ） *Hordeum-Triticum* 果実 イネ科

炭化し黒色で、楕円形を呈す。背面には縱に一本の溝がある。熱を受け著しく発泡し、形態が損なわれているため、ムギ類（オオムギ・コムギ）までしか同定ができなかった。

(3) 試料3：堆積物

錢貨付近および錢貨クリーニング時にはずれたものであり、実体顕微鏡観察では、膜面を呈する層が認められた。錢貨に面した部分あるいは下面に空間があり、堆積物の乾燥過程で膜面状に形成されたとみなされる。これらは分析の結果、微細な炭化物が小量観察される以外は、形態分類できるものは、観察されなかった。

4. 所見

錢貨が埋納された甕内から検出された炭化物は、試料1がヤブツバキ種子、試料2がムギ類（オオムギ・コムギ）果実であり、試料3堆積物からは微細な炭化物以外は検出されなかった。これらは炭化したもののみが保存環境において残存したと考えられる。有機質が分解される乾燥か乾湿を繰り返

す環境が示唆される。ヤブツバキ種子とムギ類（オオムギ・コムギ）果実は、当初から炭化していた可能性が高く、炭化していたために残存したとみなされる。ムギ類（オオムギ・コムギ）果実は発泡痕が残り、燃焼している。一方、ヤブツバキ種子は、発泡がなく、燃焼を伴うような炭化ではなく、意識的に炭として作られたことも考えられ、炭として甕に当初から入れられていた可能性もある。

参考文献

- 笠原安夫 1988 「作物および田畠雜草種類」『弥生文化の研究 第2巻 生業』雄山閣出版, p.131 - 139.
- 金原正明 1993 「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本 第10巻 古代資料研究の方法』角川書店, p.248-262.
- 中村 純 1973 「花粉分析」古今書院, p.82-110.
- 南木勝彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究 第4巻 生産と流通Ⅰ』雄山閣出版株式会社, p.165 - 174.
- 吉崎昌一 1992 「古代雜穀の検出」『月刊考古学ジャーナル No.355』ニューサイエンス社, p. 2 - 14.

図 版



錢貨を入れた土師器



1. 土師器の出土状況（北から）



2. 土師器の出土状況（東から）



1. 土師器内の銭貨出土状況（北から）



2. 発見直後の銭貨の状況（北から）



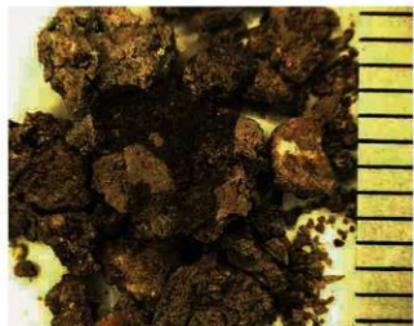
試料 1 : 炭化物

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. 炭化種子

試料 2 : 炭化物

ムギ類 (オオムギ - コムギ)

Hordeum-Triticum 果実



試料 3 : 堆積物 膜面状部

1 目盛り : 1 mm

錢貨を入れた土師器内の炭化物と堆積物



1. 調査区全景（東から）



2. 調査区全景（南東から）



1. 調査区全景（北から）



2. 調査区全景（北から）



1. 調査区全景（真上から）



2. 調査区全景（北東から）



1. 溝（SD 1）付近におけるⅡ区南壁の状況（北東から）



2. Ⅱ区北壁の状況（南東から）

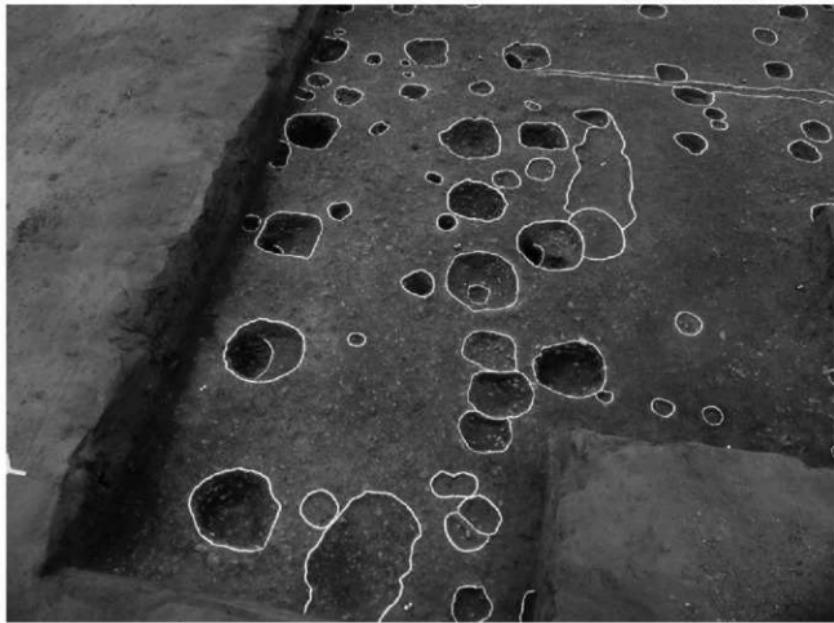


1. カマドおよび遺物の検出状況（南東から）



2. 床面確認状況（南から）

図版6 掘立柱建物・ピット



1. 建物1 完掘状況（東から）



2. I区 遺構完掘状況（東から）

図版7 掘立柱建物・ピット



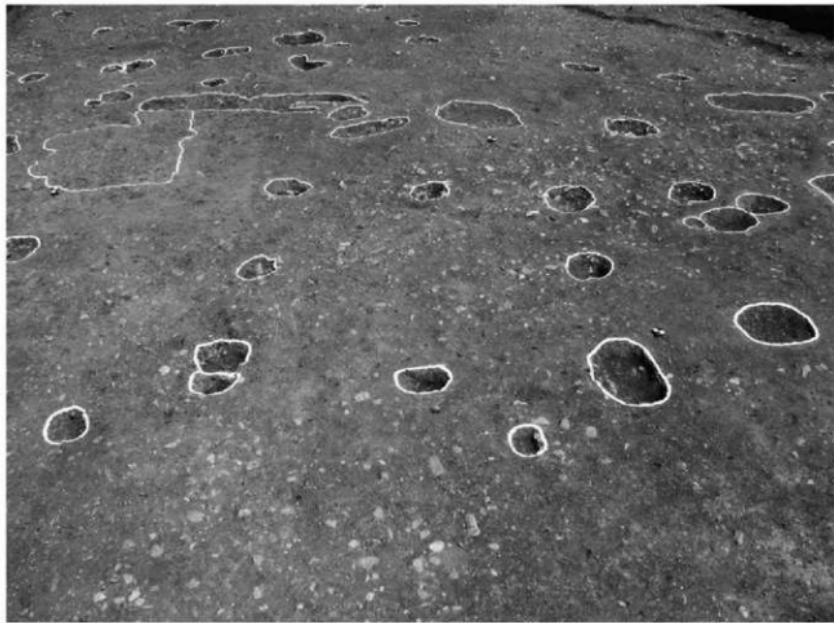
1. 建物2 完掘状況（拡張前、北から）



2. II区 遺構完掘状況（北から）



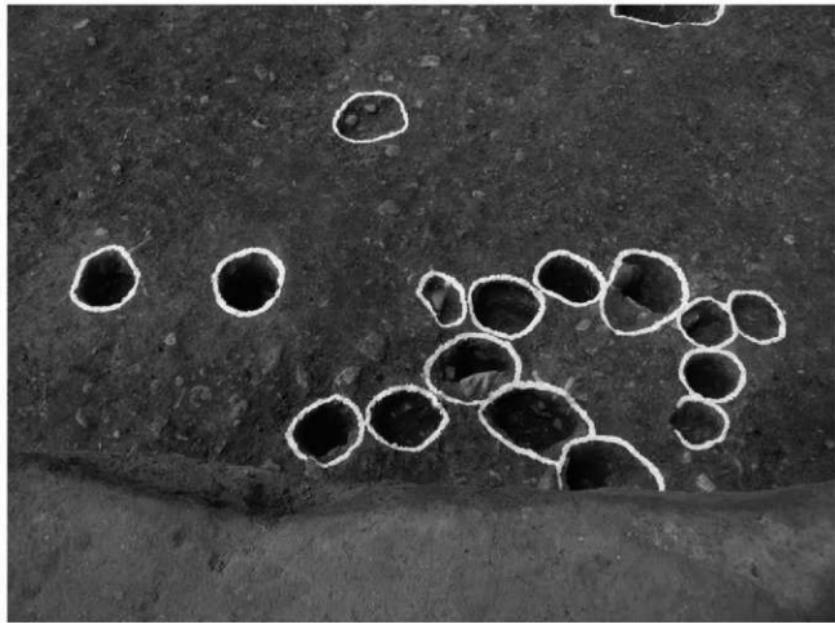
1. 建物3 完掘状況（北から）



2. 建物4 完掘状況（南西から）



1. I・II区 遺構完掘状況（北西から）



2. 小ピット群 完掘状況（東から）



1. 土師器内の銭貨出土状況（北から）



2. 土師器内の銭貨出土状況（北から）



1. 遺物の出土状況（北東から）

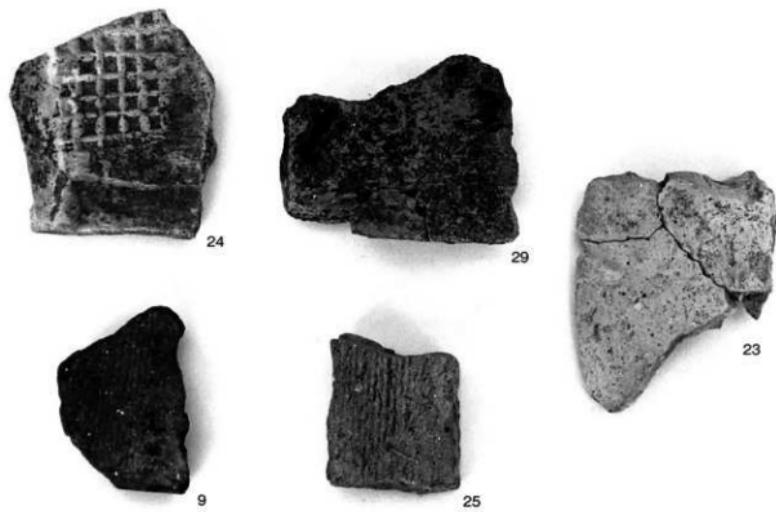
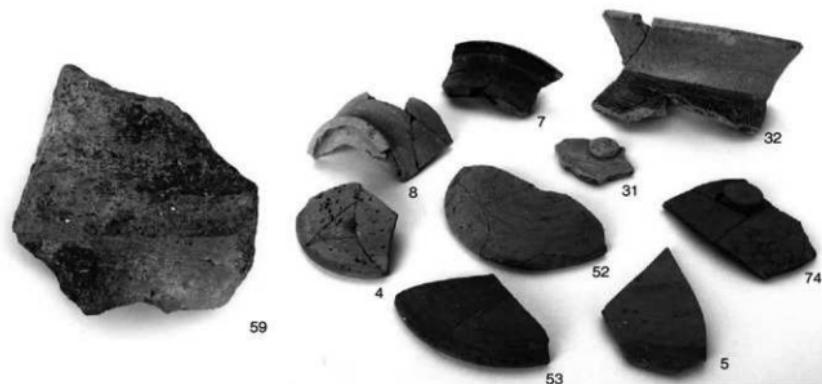


2. 遺物の出土状況（南東から）

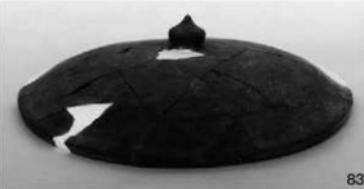
図版 12 出土遺物（土師器）

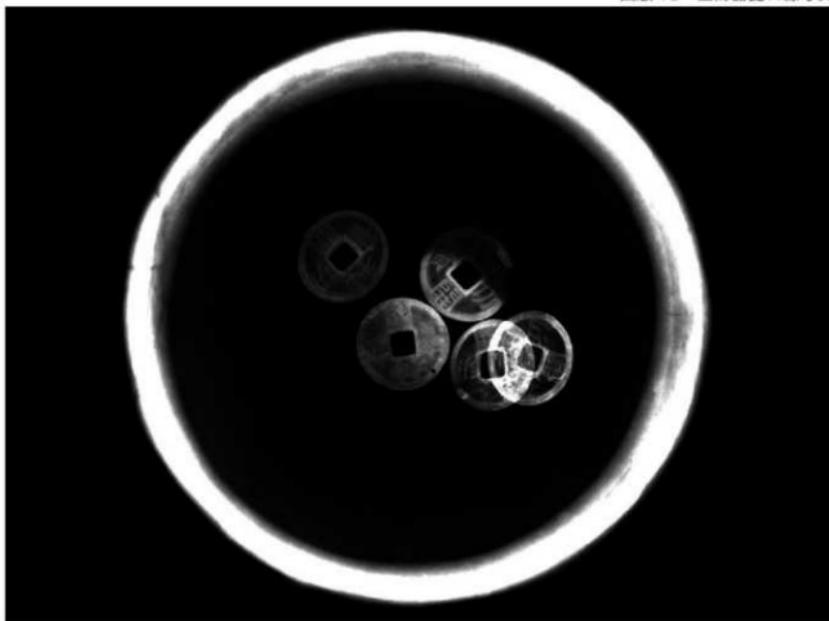


図版 13 出土遺物（土師器、須恵器ほか）

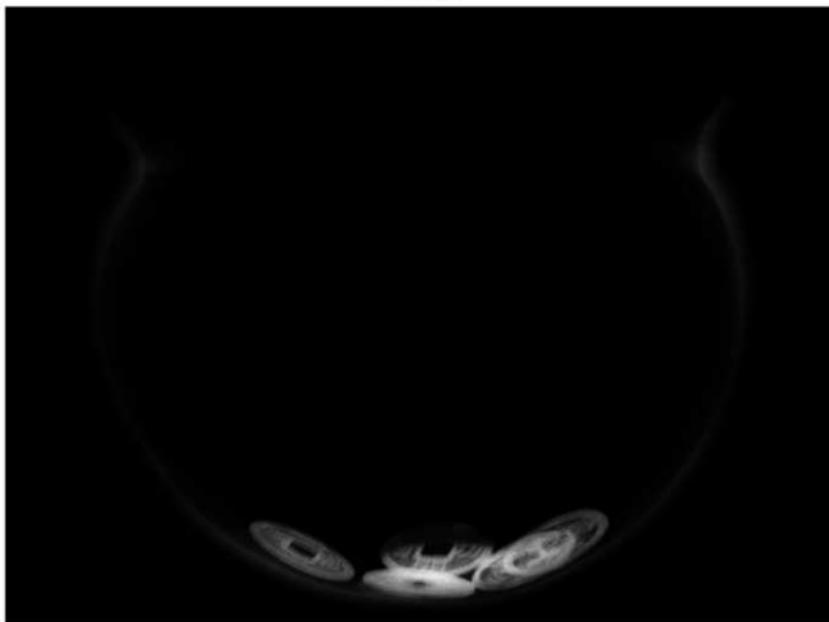


図版 14 出土遺物（須恵器）





1. 上から



2. 横から

報告書抄録

ふりがな	はたけだいせき							
書名	烟ヶ田遺跡							
副書名	(仮称)新みどり保育園の建設に伴う発掘調査(HD2011-1)							
シリーズ名	富田林市文化財調査報告							
シリーズ番号	48							
編著者名	角南辰馬(編)栗田薫							
編集機関	富田林市教育委員会							
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号 TEL 0721-25-1000(代)							
発行年月日	2012(平成24)年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はたけだいせき 烟ヶ田遺跡	とみだばやしわかまつちよりいっちょりめ 富田林市若松町一丁目	27214	28	34° 30° 13°	135° 36° 14°	20110711 ~ 20110831	758	保育園の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
烟ヶ田遺跡	集落	飛鳥～奈良時代	堅穴住居、掘立柱建物、溝、土坑	土師器、須恵器、瓦		土坑から神功開寶5枚を入れた土師器が出土		

富田林市文化財調査報告 48

烟ヶ田遺跡

—(仮称)新みどり保育園の建設に伴う発掘調査(HD2011-1)—

発行年月日 2012年1月31日

編集・発行 富田林市教育委員会

富田林市常盤町1番1号

印 刷 やまかた株式会社

大阪市北区中津2丁目3番15号